



40th Anniversary

ありがとう。これからも。

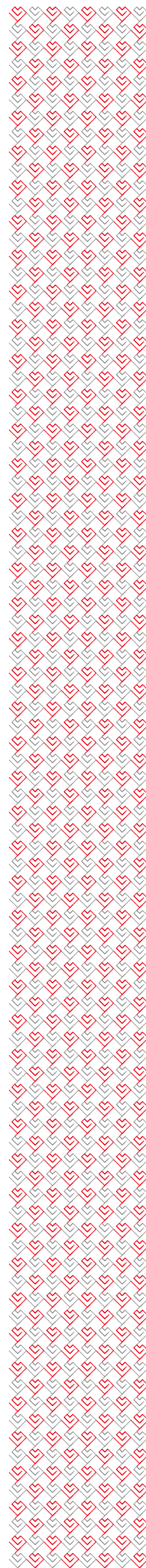
献血10年のあゆみ

平成24年度～令和3年度（2012年4月～2022年3月）

創立40周年記念誌



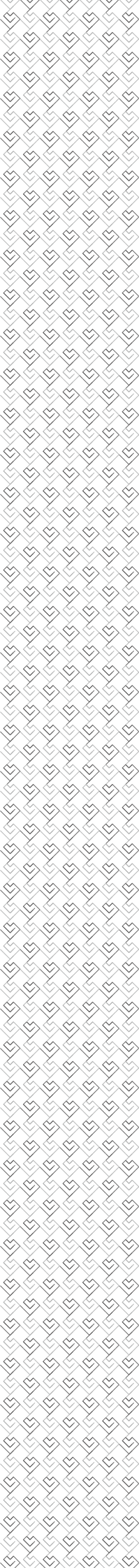
佐賀県赤十字血液センター
Japanese Red Cross Saga Blood Center





献血10年のあゆみ

創立40周年記念誌



— 創立40周年に寄せて —

いのちをつなぐ。

日本赤十字社佐賀県支部

支部長 山口 祥義



佐賀県赤十字血液センターは、このたび、昭和57年の開設から40周年という大きな節目を迎えました。

日頃から血液事業を支えていただいている県民の皆様ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

今年は、日本赤十字社の創設者である佐賀県出身の佐野常民の生誕200年という記念すべき年にあたります。

佐野が大切にしてきた分け隔てなく人を思いやり、助けを必要とする人々に手を差し伸べようとする博愛の心を、しっかりと受け継ぎ、未来へつないでいくことが私たちの使命であると感じています。

近年、各地で発生する自然災害や長期化する新型コロナウイルス感染拡大などにより、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。

そのような中、日本赤十字社では、世界最大の人道支援ネットワークを活かし、各国と連携することで、助けを必要としている人々に寄り添った活動を続けています。

佐賀県赤十字血液センターにおいても、災害時における県境を越えた各血液センター間の連携を行うとともに、新型コロナウイルス感染症対策を徹底し県民の皆様や企業の皆様から協力をいただき、必要な献血者数を確保してきたところです。

一方、今、全国的に懸念されているのが若者の献血率の低下です。

少子高齢化により日本では、将来的に献血可能人口が減少すると推測されており、中でも若年層の献血率は低い状況が続いています。

このため、佐賀県においても、大学や高校での献血セミナーの開催や学域献血に力を入れるとともに、SNSなどを活用した若年層向けの情報発信をさらに強化することで、若い世代へ当事業の理解促進に一層力を入れてまいります。

「博愛これを仁という、仁とは人を慈しむこと」

佐野が残したこの言葉のように、佐賀県は、人と人とのつながりが強く、お互いを想いあえる慈しみの県です。

佐賀県赤十字血液センターは、県民の皆様の思いとともに、これからも大切な命を守り、未来へとつないでいきます。

皆様の変わらぬご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

10年間の振り返りと、 今後の課題

佐賀県赤十字血液センター
所長 松山 博之



血液事業の推進に関しましては、平素から格別なご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。この10年間、皆様の協力のおかげをもちまして、基本理念である「安全な血液を必要な時必要な量を届けます」を、より発展させることができました。

それでは、創立40周年に際し、佐賀県赤十字血液センターの直近10年間のトピックを振り返ってみたいと思います。

第一は平成24年に血液事業の広域事業体制が始まった事です。それまでは各県で採血・検査・製造・供給を行っていましたが、その内、検査及び製造をブロックセンターに集約する事になりました。この結果、検査手順と血液製剤の標準化、高品質化が進み、また、財政についても県支部から独立し、血液事業本部に一本化されました。しかし、平成26年度から28年度にかけ、血液事業は赤字に転落しました。このため平成27年度より改善活動が本部主導で導入されました。これらを契機に、職員の改善・経営意識が見直され、赤字を脱却し、経営体制が強化されました。

第二は供給体制の見直しです。各血液センターから遠方の地域の基幹病院に血液製剤を備蓄しておくというのが長年の慣例でしたが、交通網の整備が進み、法的にグレーゾーンであった備蓄制度を平成30年度に全国一斉に廃止しました。医療機関と話し合い、定時配送ルートの見直しや増便を行うことで対応しました。

第三は「γグロブリン」など血漿分画製剤の大幅な需要増加があげられます。献血された血液は輸血用血液製剤と血漿分画製剤用の原料血漿となります。令和元年度に原料血漿確保量が約90万Lから120万Lに引き上げられました。この折、日赤以外の新たな採血事業者の参入が検討され、法改正も行われましたが、幸い日赤のみで必要量を確保できました。佐賀県でも成分献血者を約2,500人増加しました。

第四は令和2年に始まった新型コロナウイルス感染症の拡大です。未知の感染症により、献血者が一時的に激減しました。「献血は不要不急にはあたらない」を合言葉に、全国的に広報を強化し、感染対策のため献血会場の環境改善を行いました。佐賀センターでも、会議室を献血者待合室として開放しました。これらの結果、コロナ禍でも献血者を維持することができました。

また、近年増加している自然災害も、大きな問題です。佐賀県でも令和元年から毎年のように大雨や洪水にみまわれ、供給ルートが遮断される事態が発生しました。災害対策はブロックセンターが中心となり、オール九州での対応が進んでいます。

続いて、今後の課題について触れたいと思います。

まずは広域事業体制の強化です。自県自給の需給計画の寄せ集めで始まった広域事業体制から、今後は九州全体を需給対象と捉え、各県が今までの特徴を生かした役割分担を担い、「全体最適」を目指します。佐賀県においても、全血採血の強化、成分採血では血小板強化が求められます。また、各種作業の標準化を進め、適正人員の評価も始まり、これらを通して組織運営の見直しを図ります。

次にウィズコロナ時代の推進活動も重要です。コロナにより、人々の生活様式や働き方が変わり、従来の献血推進のあり方を見直す必要に迫られます。クラスターや濃厚接触者の拡大が感染の波ごとに現れ、その都度対応に迫られます。企業・職域での「集団献血」から「個人の献血」へとシフトしてゆくと思われます。そのためには、個人の献血者登録（ラブラッド）の拡大が求められており、ラブラッド会員（登録者）への献血要請が献血推進の中心になると考えられます。尚、ラブラッドには献血カード機能、予約、問診機能などが追加される予定です。

最後に若年層（10代～30代）の献血者増加対策です。日々の献血者確保に迫られ、後手になりがちなのですが、長い目で見ると大変重要な課題です。コロナ禍での献血啓発（セミナー）のあり方、学域献血のみならず、部活動を対象とした小規模献血など、より細やかで柔軟な対応も必要となるでしょう。

血液事業は、県や市町、献血推進協力団体の皆様のご協力で成り立っています。

今後とも、佐賀県赤十字血液センターを宜しくお願いいたします。

この10年を振り返って

佐賀県赤十字血液センター
事業部長 田中 幸徳



平成24年4月1日は、日本赤十字社血液事業における広域事業運営体制がまさにスタートした年であり、全国の血液センターにおいて大きな節目の年となりました。時を同じくして、当血液センターもちょうど創立30周年を迎え、併設の「献血プラザさが」は3月22日にリニューアルオープンを終えたばかりでした。快適さを追求した待合室や採血室は新感覚のデザインに改装され、広域化に伴う組織体制も変わったことで、当時の職員は新たな気持ちでこの瞬間を迎えられたのではないのでしょうか。

それまでは各県の血液センターによる独立した事業運営が行われていましたが、福岡県久留米市に本社直轄の九州ブロック血液センターが設置され、資金の一元管理に加えて九州内の検査・製剤、需給管理及び企画・管理業務を集約することで、各県の枠を超えた、より広域的な運営体制に移行されました。これにより、検査手順と血液製剤の標準化、高品質化が進み、さらには九州管内全血液センターが一体となって事業運営を行う中で、職員の目標意識や改善意識の醸成が進められてきました。

広域事業運営体制がスタートした当時、私は福岡県の血液センターに勤務していました。以前から佐賀センター主催のイベントには顔を出したり、会議や研修会など業務を通して顔見知りの職員も何名かいましたが、まさか自身がここに転勤することになるとは思ってもいませんでした。

平成30年度から当血液センターに勤務するようになり、すでに4年が経ちました。特に令和2年から全国的に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症により、血液事業はたいへんな影響を受けてまいりました。現在においてもコロナ禍による様々な対応が求められており、厳しい状況が続いていますが、輸血用血液製剤を必要とする患者様に安心して治療に専念していただくために、我々は献血者を確保し、安全な血液を安定的にお届けする気持ちを持ち続けていかなければなりません。

献血者の皆様の想いを患者様に届けることが私たちの使命であり、これから次の世代に「日本の献血文化」をしっかりと引き継ぐために頑張っていきたいと思います。



血液センター外観



献血プラザさが 待合室



献血プラザさが 採血室



はたちの献血キャンペーン（平成25年度）



職場体験（平成27年度）



若年層啓発活動（平成27年度）



献血セミナー（平成28年度）



サマー献血キャンペーン（平成29年度）



キッズ献血・模擬献血（令和元年度）



クリスマス献血キャンペーン（令和2年度）



移動採血（令和3年度）

目 次

あいさつ

- ー 創立40周年に寄せて ー いのちをつなぐ。
日本赤十字社佐賀県支部 支部長 山口 祥義
- 10年間の振り返りと、今後の課題
佐賀県赤十字血液センター 所長 松山 博之
- この10年を振り返って
同センター 事業部長 田中 幸徳

写真アーカイブ

目 次

I 佐賀県赤十字血液センター 10年の変遷

1 トピック（特記すべき事業）	1
(1) 血液事業広域事業運営体制への転換（平成24年4月）	1
(2) 日本赤十字社名誉総裁 秋篠宮紀子妃殿下がご視察（平成24年11月）	1
(3) 県境を越えての血液製剤の供給開始（平成26年5月）	1
(4) 熊本地震発災時の対応（平成28年4月）	2
(5) 献血者数150万人突破（平成29年4月）	2
(6) 供給体制の見直し（平成31年4月）	3
(7) コロナ禍における献血活動（令和2年1月～）	3
2 タイムライン（年表）	4
3 献血の状況	7
(1) 献血者数の推移（全体）	7
(2) 献血者数の推移（年齢層別）	8
(3) 献血者数の推移（職業別・男女別）	9
(4) 献血者数の推移（施設別）	10
(5) 献血者数の推移（実施場所市町別）	11
4 血液製剤の供給状況	12
(1) 血液製剤使用の推移	12
(2) 血漿分画製剤使用の推移	14
5 輸血用血液の安全対策	15
(1) 血液事業におけるIT化	15
(2) シャーガス病にかかる安全対策	15
(3) 輸血用血液製剤の変遷	16

6 献血思想の普及	19
7 献血表彰の実施	24
(1) 厚生労働大臣表彰受賞団体	24
(2) 佐賀県知事感謝状受賞団体	24
(3) 日本赤十字社有功章受章団体	25
(4) 日本赤十字社創立140周年記念社業功労者社長特別表彰受賞団体	26
(5) 日本赤十字社佐賀県支部長感謝状受賞団体	26
8 医薬情報活動の実施	28
9 医療機関への技術協力	29
(1) 自己血輸血への技術協力	29
(2) 輸血関連検査への技術協力	29
(3) 末梢血幹細胞移植への技術協力	30
(4) 佐賀県合同輸血療法委員会	30
10 骨髄ドナーの受付	36
11 その他の取組み	37
(1) 日本輸血・細胞治療学会認定 アフエレーシスナースの育成	37
(2) 分割血小板採血の開始	37
(3) 原料血漿確保に向けて（40本/日）	37
(4) 採血副作用対策の強化（水分摂取について）	37
(5) 全血採血時における検査方法の変更（指先穿刺の導入）	37
(6) 献血者の保護対策	37

II 血液事業学会 発表事例

血液事業学会 発表事例	39
-------------------	----

III 組織図の変遷

組織図の変遷	49
--------------	----

IV 創立40周年に寄せて

1 佐賀大学医学部長 末岡 榮三朗	51
2 ライオンズクラブ国際協会337-C地区 第1副地区ガバナー 古賀 義行	52
3 九州電力株式会社佐賀支店 企画・総務部 人事労務グループ長 白濱 文昭	53
4 株式会社戸上電機製作所 管理本部総務グループ マネージャー 平原 直哉	54
5 佐賀県 健康福祉部長 久保山 善生	55
6 九州ブロック血液センター 所長 入田 和男	56

あとがき



I

佐賀県赤十字血液センター 10年の変遷



40th Anniversary

1 トピック(特記すべき事業)

(1) 血液事業広域事業運営体制への転換(平成24年4月)

平成24年4月1日より血液事業運営体制を各都道府県の血液センター単位から、より広域的なブロックを単位とする運営体制に変更しました。全国を7つのブロック(北海道、東北、関東甲信越、東海北陸、近畿、中四国、九州)に分け、九州ブロックは「九州ブロック血液センター(福岡県久留米市)」を中心に九州・沖縄8県の各地域血液センターで構成されます。

この運営体制の変更は、都道府県の枠を超えた血液の需給バランスの調整を行う広域需給管理や、これまで各センターで行っていた検査・製剤を1ヶ所に集約し、安全性の向上と効率化を図る検査・製剤の集約化等々、血液製剤の更なる「安全性の向上」と「安定供給の確保」を目的としています。

当センターでは、平成11年度から検査業務を福岡県赤十字血液センターに委託し、同13年度から製剤業務を同血液センターに集約するなど全国に先駆けて集約化に取り組んで参りました。この佐賀・福岡両血液センターの業務集約がきっかけとなり、九州8県センターによる九州ブロック業務集約化(平成20年1月)を経て、今日の全国的な広域事業運営体制への契機となりました。



日本赤十字社九州ブロック血液センター

(2) 日本赤十字社名誉総裁 秋篠宮紀子妃殿下がご視察(平成24年11月)

平成24年11月13日、日本赤十字社名誉総裁である秋篠宮紀子妃殿下が当センターをご視察されました。

当センター佐川公矯所長が県内の献血状況等についてパネルを使って説明を行ったほか、坂本恭子看護師が健康相談事業で使用する「体組成分析装置」と「加速度脈波測定装置」の運用について説明を行いました。妃殿下はこれらの装置に実際に触れられたり関心をお示しになられたご様子でした。

また、採血室では献血者お一人おひとりに優しくお言葉を掛けられていました。



秋篠宮妃殿下と坂本看護師

(3) 県境を越えての血液製剤の供給開始(平成26年5月)

安定供給及び広域需給管理体制強化策の一環として、医療機関への血液製剤供給にかかる時間短縮を目指し、平成26年5月より佐賀県赤十字血液センターと福岡県赤十字血液センターとの間で県境を越えた血液製剤の供給体制を開始しました。

この供給エリアの見直しにより福岡県大川市及び柳川市は佐賀センターから、佐賀県鳥栖市及び三養基郡基山町は福岡センターからそれぞれ供給する運用となりました。

新たな供給運用を開始した後で実施した対象医療機関へのアンケート調査では、血液製剤の供給にかか

る時間が短くなったという回答を数多く頂きました。

今後においても医療機関との連携を密にしながら、患者さんが安心して輸血を受けることができるようサービス向上に努めています。



輸血用血液製剤搬送用緊急車両

(4) 熊本地震発災時の対応（平成28年4月）

平成28年4月に発生した熊本地震災害は、2度にわたり最大震度7を記録し、熊本地方を中心に大きな被害をもたらしました。

日本赤十字社では、発災直後から速やかに全国から医療救護班を派遣し、刻々と変化する医療ニーズ等に対して、こころのケア活動や避難所支援活動を実施するなど、3か月半にわたり「災害から命を守る活動」を行いました。

熊本市内の献血ルームも、建物や採血機材が損壊し、一時期閉所を余儀なくされました。その間、当センターを含む九州各県の血液センターが協力し、血液の安定供給のために尽くしました。



日本赤十字社熊本県支部災害対策本部の様子

(5) 献血者数150万人突破（平成29年4月）

血液事業が佐賀県から当血液センターに移管された昭和57年4月からの献血者数が、平成29年4月4日に累計150万人を達成しました。

150万人目となった黒田淳子さん（佐賀市在住）は定期的に血液センターを訪れる頻回献血協力者でもあり、この日はご自身の138回目の献血でした。黒田さんは「若い時に母に連れられて献血に来て以来、誰かの役に立てればと思い献血を続けてきました。これからも健康に気を付けて続けていきたい。」と笑顔で話されていました。



献血者150万人達成記念セレモニー

（６）供給体制の見直し（平成31年４月）

・ 備蓄医療機関制度の廃止

備蓄医療機関制度については、これまで地域の行政や医師会等の要望に基づき行われてきましたが、医薬品、医療機関等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律などの関係法令との整合性に疑義があるため、当該制度を平成31年３月31日をもって廃止し、行政と連携のうえ、地域における輸血用血液製剤の確保等を構築しました。

唐津地区：唐津赤十字病院

伊万里地区：社会医療法人謙仁会山元記念病院

杵藤地区：独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター

・ 配送体制

定時外配送（時間指定便及び緊急便）の不要不急な利用を避け、定期配送を基本とすることにより合理的な供給体制を構築し、真に緊急を要する場合の的確な対応が取れるよう体制を充実しました。

・ 受注体制

発注者側及び受注者側の聞き間違い等による過誤の発生が散見されることから、医療機関担当者がインターネットから直接入力する受注体制への移行を推進し、受注時の過誤防止を図るとともに業務の合理化を目指しました。平成26年に血液製剤発注システムを導入し、令和２年11月には、より使いやすくリニューアルし、令和６年４月web受注への移行に向けて本格的な稼働が始まりました。



（７）コロナ禍における献血活動（令和２年１月～）

令和元年12月に中国武漢市で原因不明の肺炎が報告されて以降、瞬く間に全世界へと広がった新型コロナウイルス感染症の影響で、人々の生活様式が一変しました。

これにより、血液事業を取り巻く環境も大きく変わり、各血液センターでは様々な対応が必要となりました。

当血液センターでは、このような状況下においても血液の安定供給を図るため、献血者、受血者及び職員の安全確保に努めました。

まず、感染対策として、職員のマスク、フェイスシールドの着用や手指消毒等の基本的な対策に加え、献血者同士の密を避けるため、３階会議室を待機スペースとして常時開放し、待ち時間削減対策としての予約献血推進を積極的に行いました。

また学域における献血協力が制限される中、WebサイトやSNSによる情報発信を強化し、献血プラザさがでの献血を依頼するなど、若年層対策にも力を入れたことにより、一時期の減少傾向を乗り越え、コロナ禍以前を上回る献血者数を確保することができました。



感染対策を行いながら採血する様子

2 タイムライン(年表)

◎ 平成24年度(2012年度)

- **4月** 血液事業の広域事業運営体制を開始
「日本赤十字社九州ブロック血液センター」設立
有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀・武雄、フレスポ鳥栖)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **8月** HBc抗体判定基準の変更
移動採血会場にて体組成分析装置等を用いた健康相談の開始
- **10月** 血漿分画事業を一般社団法人日本血液製剤機構へ移管
シャーガス病の安全対策に係る献血受入手順の開始(10月15日より)
バルーン献血(10月31日～11月4日)
- **11月** 日本赤十字社名誉副総裁秋篠宮紀子妃殿下が当血液センターをご視察
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- **1月** 「献血の同意説明書」を導入
「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)

この年に起きた出来事

平成24年5月22日
「東京スカイツリー」
オープン

東京の新しい観光名所として東京墨田区に建設された。高さ634mの世界一高いタワーとなった。

◎ 平成25年度(2013年度)

- **4月** 有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀・武雄、フレスポ鳥栖)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **10月** バルーン献血(10月31日～11月4日)
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- **1月** 「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)

この年に起きた出来事

平成24年7月11日
九州北部豪雨

福岡、熊本、大分、佐賀で大雨。死者30人、行方不明者3人、負傷者34人の大きな被害となった。

◎ 平成26年度(2014年度)

- **4月** 有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **5月** 県境を越えた血液製剤供給体制の運用開始
(大川・柳川地区を佐賀BCから、鳥栖・基山地区を福岡BCから供給)
血液事業情報システム稼働開始
(移動採血にタッチパネル式問診回答を導入。問診票の電子カルテ化及びICカード化による献血者情報の取込み)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀、ジャスコ唐津店他)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **8月** 核酸増幅検査(NAT)の個別検査開始
- **10月** 検査サービス通知書の基準値を変更(10月1日採血分より)
バルーン献血(10月30日～11月3日)
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- **1月** 「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)
- **3月** 血漿分画製剤の供給終了

この年に起きた出来事

平成26年4月1日
消費税5%→8%に
消費増税17年ぶり

増収は、医療や年金などの社会保障費の財源に充てられた。

◎ 平成27年度(2015年度)

- **4月** 有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(フレスポ鳥栖、ジャスコ唐津他)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **10月** バルーン献血(10月30日～11月3日)
- **11月** 成分採血装置トリマアクセル1台を導入。分割血小板採血を開始。
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(メリーランド武雄ボウリングセンター他)
- **1月** 「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)

この年に起きた出来事

平成27年10月11日
ラグビーW杯で日本が歴史的3勝

過去2回優勝の南アフリカ、サモア、アメリカに勝利も、グループBで3位となり1次リーグ敗退。

◎ 平成28年度(2016年度)

- **4月** ALT基準値の変更(4月1日採血分より)
有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀、ジャスコ唐津店)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **8月** クロスレター交換式開催(佐賀県医療センター好生館)
- **10月** バルーン献血(10月28日～11月6日)
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- **1月** 「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)

この年に起きた出来事

平成28年4月14日
熊本地震 M6.5 益城町で震度7

2日後の16日にもM7.3の地震があり、益城町と西原村で震度7の揺れを観測した。気象庁は14日の地震を「前震」、16日の地震を「本震」とする見解を示した。

◎ 平成29年度(2017年度)

- **4月** 佐賀センター献血者150万人突破 記念セレモニー実施
(県から血液事業移管[昭和57年4月]後、累計献血者数150万人を突破)
有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀、フレスポ鳥栖)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **11月** バルーン献血(11月1日～11月5日)
- **12月** 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(イオン唐津、ゆめタウン佐賀)
- **1月** 「はたちの献血」キャンペーン(ゆめタウン佐賀)

この年に起きた出来事

平成29年6月12日
上野動物園でパンダ誕生

9月25日に「シャンシャン(香香)」と命名。一般から寄せられた32万2千件余の名前から選考。

◎ 平成30年度(2018年度)

- **4月** 本人確認区分及び運用方法の見直し
(本人確認重要項目を顔写真、氏名及び生年月日と定めた)
有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- **7月** 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀、フレスポ鳥栖)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- **10月** 『複数回献血クラブ』の愛称名を『ラブラッド』に改称(全国統一)
(献血依頼要請の効率化及び予約による献血者利便性の向上)
バルーン献血(10月31日～11月4日)
- **12月** 成分採血装置CCSを導入。分割血小板採血を開始。

この年に起きた出来事

平成30年9月6日
北海道で震度7 道内全域で停電

北海道の胆振地方を震源とする地震が6日、発生し、厚真町で最大震度7を観測した。土砂崩れなどによる死者は41人。国内初の全域停電が起きた。

- 12月 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- 1月 「はたちの献血キャンペーン・一日所長委嘱」(ゆめタウン佐賀)
- 2月 第13回いのちと献血俳句コンテスト表彰式
沖電気工業株式会社様より保冷库付献血運搬車1台を寄贈
- 3月 移動採血バス1号車を更新整備
血液製剤の直配を補完するための備蓄医療機関制度を廃止(3月31日)
(県内3ヶ所 唐津・伊万里・嬉野各地区)

◎ 平成31年度／令和元年度(2019年度)

- 4月 輸血用血液製剤の直接供給体制を開始(備蓄医療機関制度の廃止)
有田陶器市献血(4月29日～5月5日)
- 7月 「サマー献血キャンペーン」(ゆめタウン佐賀、フレスポ鳥栖)
「献血功労者表彰式・献血ふれあいフェスタ」(ゆめタウン佐賀)
- 10月 バルーン献血(10月31日～11月4日)
- 12月 「全国学生クリスマス献血」キャンペーン(フレスポ鳥栖他)
- 1月 「はたちの献血キャンペーン・一日所長委嘱」(ゆめタウン佐賀)
- 3月 移動採血バスの採血前検査において指先穿刺を導入(3月23日より)

◎ 令和2年度(2020年度)

- 4月 有田陶器市献血(新型コロナウイルス感染状況のため中止)
(献血バス振替対応として敷地内にバスを配車し必要血液量を確保)
- 7月 「サマー献血キャンペーン・献血ふれあいフェスタ」イベント(中止)
「献血功労者表彰式」(佐賀県庁・日赤佐賀県支部)
- 9月 「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」の改正に伴い、健康診断基準(血圧、脈拍、体温)の変更(9月1日より)
- 11月 新たな血液製剤発注システムの導入
- 12月 「全国学生クリスマス献血」キャンペーンイベント(ゆめタウン佐賀他)
- 1月 「はたちの献血」キャンペーンイベント(中止)

◎ 令和3年度(2021年度)

- 4月 有田陶器市献血(新型コロナウイルス感染状況により中止)
(献血バス振替先として県庁、商業施設へ配車し必要血液量を確保)
- 7月 「サマー献血キャンペーン・献血ふれあいフェスタ」イベント(ゆめタウン佐賀・フレスポ鳥栖)
- 8月 キッズ献血(中止)
- 11月 「献血功労者表彰式」(佐賀県庁・日赤佐賀県支部)
- 12月 「全国学生クリスマス献血」キャンペーンイベント(ゆめタウン佐賀他)
- 1月 「はたちの献血」キャンペーンイベント(中止)
「献血プラザさが」でも全血献血(200・400mL)
希望者に限り採血前検査で指先穿刺へ変更(1月17日より)

この年に起きた出来事

平成30年9月4日
台風21号が上陸
関西国際空港で
大きな被害

台風は非常に強い勢力で徳島から神戸に上陸。関西空港では滑走路や敷地内建物が浸水、更に空港の連絡橋に風で煽られたタンカーが衝突して通れなくなり、約3,000人が取り残された。

この年に起きた出来事

平成31年4月1日
新元号は「令和」
出典は万葉集

政府は臨時閣議で平成に代わる新しい元号を「令和」とすることを決め、菅官房長官が発表した。

この年に起きた出来事

令和2年4月7日
新型コロナ感染拡大
緊急事態宣言発令

新型コロナの感染者急増を受け、政府は7日、東京など7都府県を対象に緊急事態宣言を発令した。

この年に起きた出来事

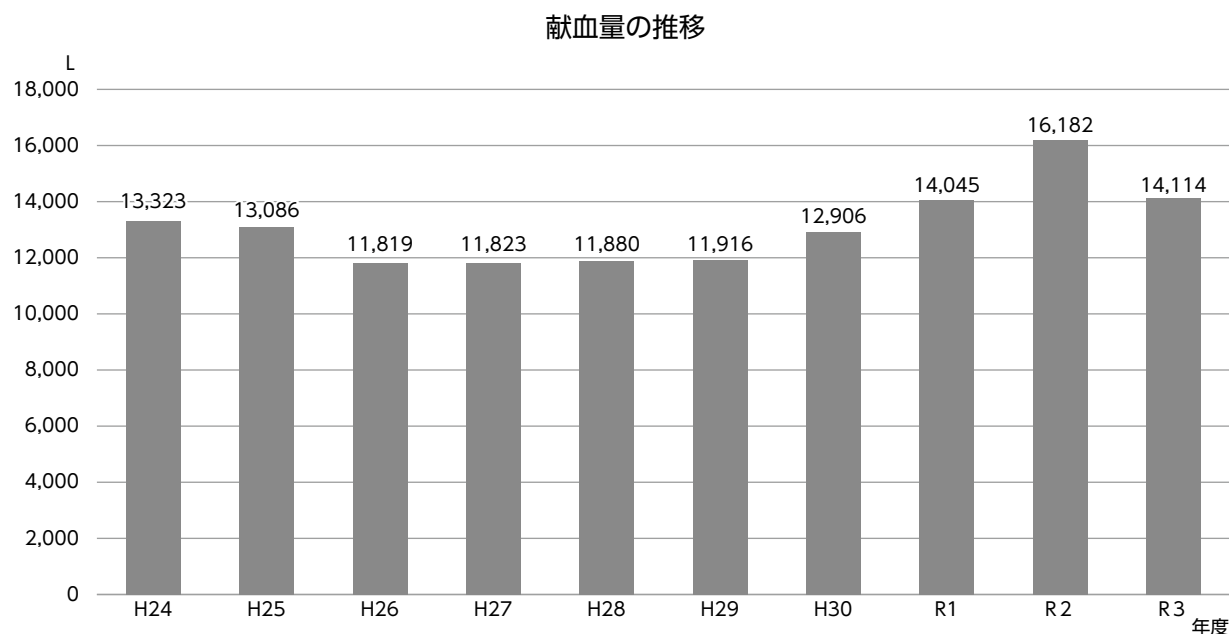
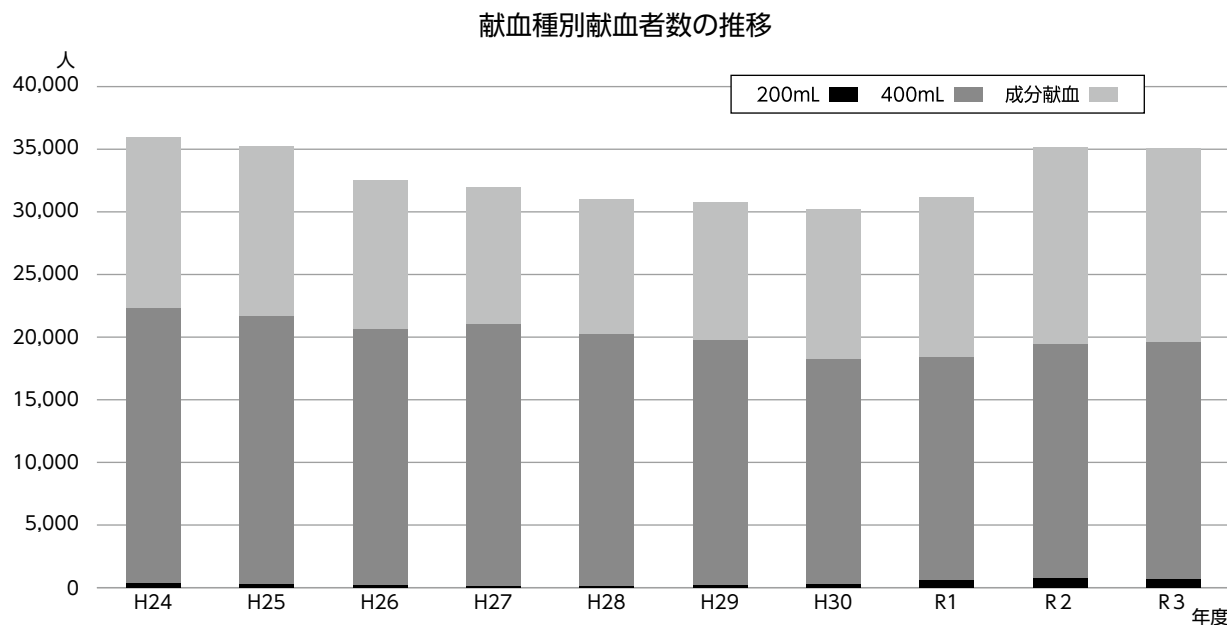
令和3年7月23日～
8月8日

東京五輪
日本は史上最多
58メダル

新型コロナの影響で史上初の1年延期となった第32回夏季五輪東京大会が23日、開幕した。日本は金メダル27個で歴代最多。メダル総数58個も夏冬を通じて最多だった。

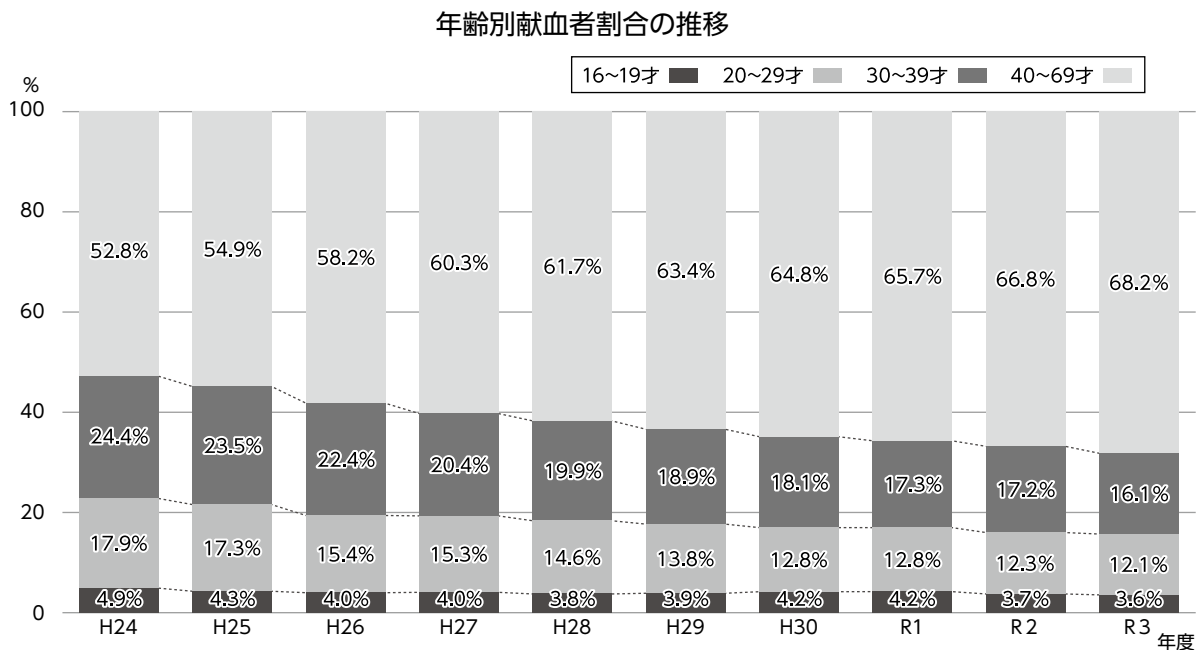
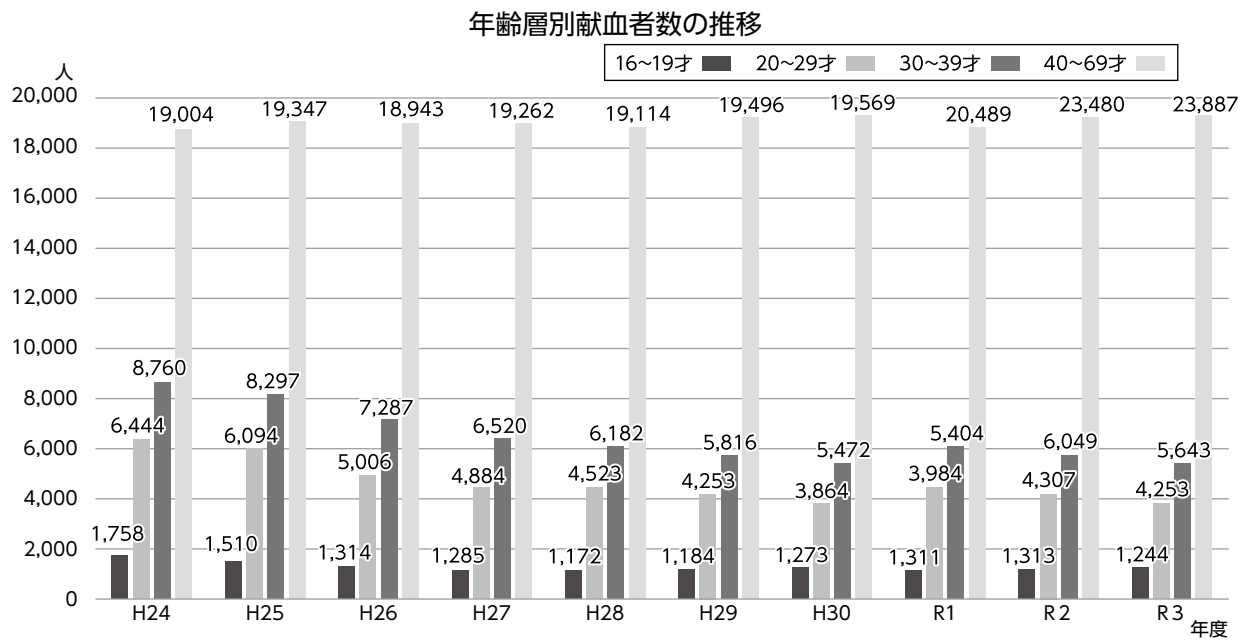
3 献血の状況

(1) 献血者数の推移（全体）



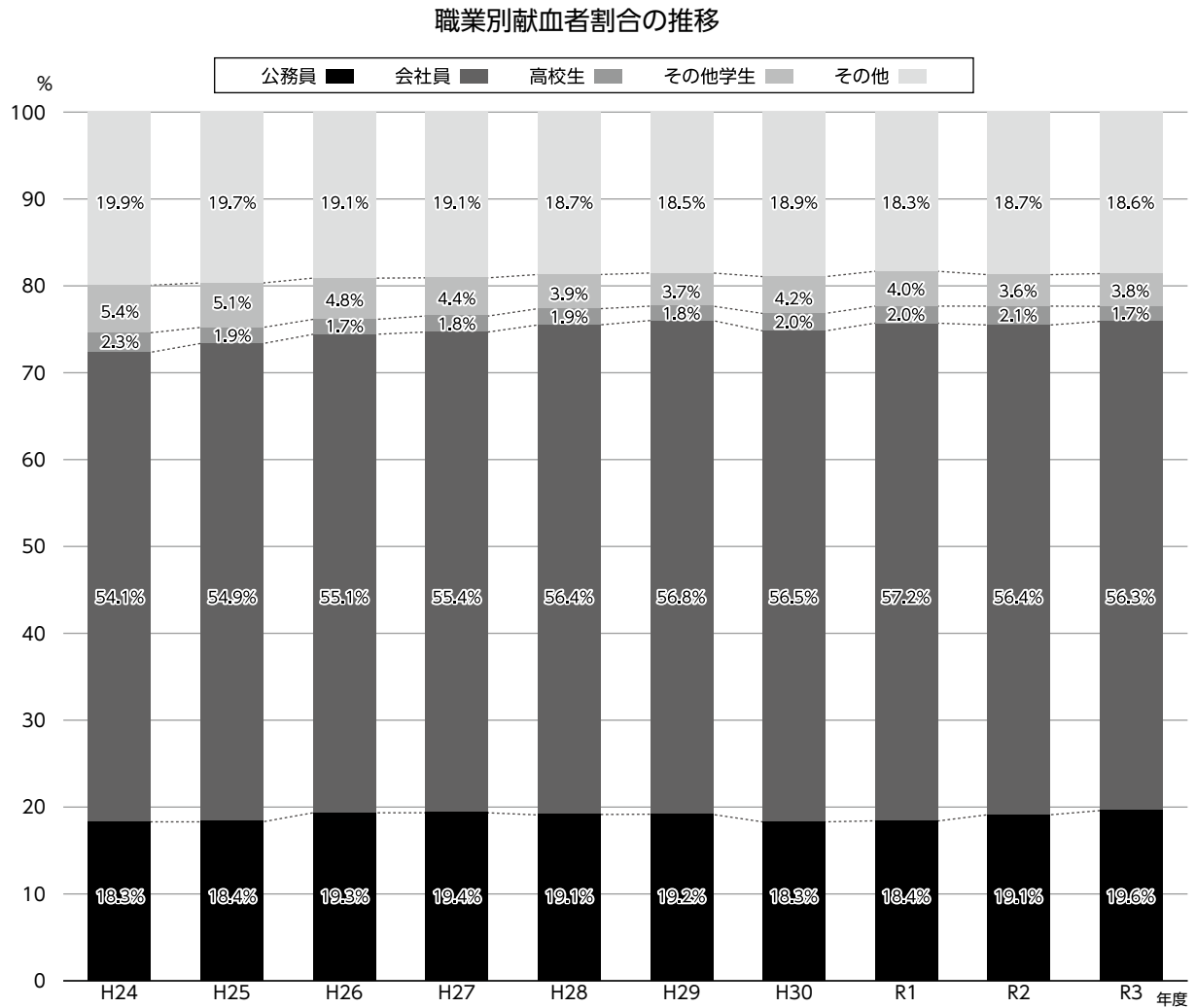
	年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
献血者数(人)	200mL	358	304	168	132	150	223	255	631	783	715
	400mL	21,905	21,374	20,489	20,875	20,060	19,489	18,027	17,726	18,616	18,895
	成分献血	13,703	13,570	11,893	10,944	10,781	11,037	11,896	12,831	15,750	15,417
	合計	35,966	35,248	32,550	31,951	30,991	30,749	30,178	31,188	35,149	35,027
献血量(L)		13,323	13,086	11,819	11,823	11,880	11,916	12,906	14,045	16,182	14,114
前年比	人	950	-718	-2,698	-599	-960	-242	-571	1,010	3,961	-122
	%	102.8	98.2	90.3	100.0	100.5	100.3	108.3	108.8	115.2	87.2

(2) 献血者数の推移（年齢層別）



年度		H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
年齢	献血者数(人)	1,758	1,510	1,314	1,285	1,172	1,184	1,273	1,311	1,313	1,244
	構成比(%)	4.9	4.3	4.0	4.0	3.8	3.9	4.2	4.2	3.7	3.6
20~29才	献血者数(人)	6,444	6,094	5,006	4,884	4,523	4,253	3,864	3,984	4,307	4,253
	構成比(%)	17.9	17.3	15.4	15.3	14.6	13.8	12.8	12.8	12.3	12.1
30~39才	献血者数(人)	8,760	8,297	7,287	6,520	6,182	5,816	5,472	5,404	6,049	5,643
	構成比(%)	24.4	23.5	22.4	20.4	19.9	18.9	18.1	17.3	17.2	16.1
40~69才	献血者数(人)	19,004	19,347	18,943	19,262	19,114	19,496	19,569	20,489	23,480	23,887
	構成比(%)	52.8	54.9	58.2	60.3	61.7	63.4	64.8	65.7	66.8	68.2
計		献血者数(人)	35,966	35,248	32,550	31,951	30,991	30,749	30,178	31,188	35,027

(3) 献血者数の推移（職業別・男女別）



(人)

職業	性別	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R 1	R 2	R 3
公務員	男	5,588	5,629	5,481	5,335	5,140	5,166	4,766	4,897	5,622	5,733
	女	981	872	817	863	794	734	767	849	1,099	1,136
	計	6,569	6,501	6,298	6,198	5,934	5,900	5,533	5,746	6,721	6,869
会社員	男	15,263	15,133	14,210	14,103	13,884	13,896	13,309	13,749	14,655	14,616
	女	4,187	4,222	3,714	3,583	3,587	3,568	3,739	4,104	5,171	5,108
	計	19,450	19,355	17,924	17,686	17,471	17,464	17,048	17,853	19,826	19,724
高校生	男	466	356	341	419	409	304	382	345	474	340
	女	356	309	209	160	179	238	223	273	277	269
	計	822	665	550	579	588	542	605	618	751	609
その他学生	男	1,147	1,093	941	864	726	683	803	718	712	690
	女	812	701	619	532	481	467	478	538	560	626
	計	1,959	1,794	1,560	1,396	1,207	1,150	1,281	1,256	1,272	1,316
その他	男	3,462	3,395	3,181	3,274	3,131	3,017	3,008	2,890	3,083	3,110
	女	3,704	3,538	3,037	2,818	2,660	2,676	2,703	2,825	3,496	3,399
	計	7,166	6,933	6,218	6,092	5,791	5,693	5,711	5,715	6,579	6,509
合計	男	25,926	25,606	24,154	23,995	23,290	23,066	22,268	22,599	24,546	24,489
	女	10,040	9,642	8,396	7,956	7,701	7,683	7,910	8,589	10,603	10,538
	計	35,966	35,248	32,550	31,951	30,991	30,749	30,178	31,188	35,149	35,027

(4) 献血者数の推移（施設別）

年度	区分	献血バス		献血プラザさが		計	
		献血者数(人)	構成比(%)	献血者数(人)	構成比(%)	献血者数(人)	構成比(%)
H24	200mL	7	0.0	351	1.8	358	1.0
	400mL	16,442	100.0	5,463	28.0	21,905	60.9
	成 分	—	—	13,703	70.2	13,703	38.1
	計	16,449	100.0	19,517	100.0	35,966	100.0
	構成比	45.7%		54.3%		100.0%	
H25	200mL	1	0.0	303	1.6	304	0.9
	400mL	16,051	100.0	5,323	27.7	21,374	60.6
	成 分	—	—	13,570	70.7	13,570	38.5
	計	16,052	100.0	19,196	100.0	35,248	100.0
	構成比	45.5%		54.5%		100.0%	
H26	200mL	0	0.0	168	1.0	168	0.5
	400mL	15,177	100.0	5,312	30.6	20,489	62.9
	成 分	—	—	11,893	68.4	11,893	36.6
	計	15,177	100.0	17,373	100.0	32,550	100.0
	構成比	46.6%		53.4%		100.0%	
H27	200mL	5	0.0	127	0.8	132	0.4
	400mL	15,400	100.0	5,475	33.1	20,875	65.3
	成 分	—	—	10,944	66.1	10,944	34.3
	計	15,405	100.0	16,546	100.0	31,951	100.0
	構成比	48.2%		51.8%		100.0%	
H28	200mL	4	0.0	146	0.9	150	0.5
	400mL	14,649	100.0	5,411	33.1	20,060	64.7
	成 分	—	—	10,781	66.0	10,781	34.8
	計	14,653	100.0	16,338	100.0	30,991	100.0
	構成比	47.3%		52.7%		100.0%	
H29	200mL	2	0.0	221	1.3	223	0.7
	400mL	14,047	100.0	5,442	26.3	19,489	63.4
	成 分	—	—	11,037	66.1	11,037	35.9
	計	14,049	100.0	16,700	100.0	30,749	100.0
	構成比	45.7%		54.3%		100.0%	
H30	200mL	0	0.0	255	1.5	255	0.9
	400mL	12,997	100.0	5,030	29.3	18,027	59.7
	成 分	—	—	11,896	69.2	11,896	39.4
	計	12,997	100.0	17,181	100.0	30,178	100.0
	構成比	43.1%		56.9%		100.0%	
R 1	200mL	383	2.9	248	1.4	631	2.0
	400mL	12,940	97.1	4,786	26.8	17,726	56.9
	成 分	—	—	12,831	71.8	12,831	41.1
	計	13,323	100.0	17,865	100.0	31,188	100.0
	構成比	42.7%		57.3%		100.0%	
R 2	200mL	441	3.2	342	1.6	783	2.2
	400mL	13,276	96.8	5,340	24.9	18,616	53.0
	成 分	—	—	15,750	73.5	15,750	44.8
	計	13,717	100.0	21,432	100.0	35,149	100.0
	構成比	39.0%		61.0%		100.0%	
R 3	200mL	485	3.4	230	1.1	715	2.0
	400mL	13,921	96.6	4,974	24.1	18,895	54.0
	成 分	—	—	15,417	74.8	15,417	44.0
	計	14,406	100.0	20,621	100.0	35,027	100.0
	構成比	41.1%		58.9%		100.0%	

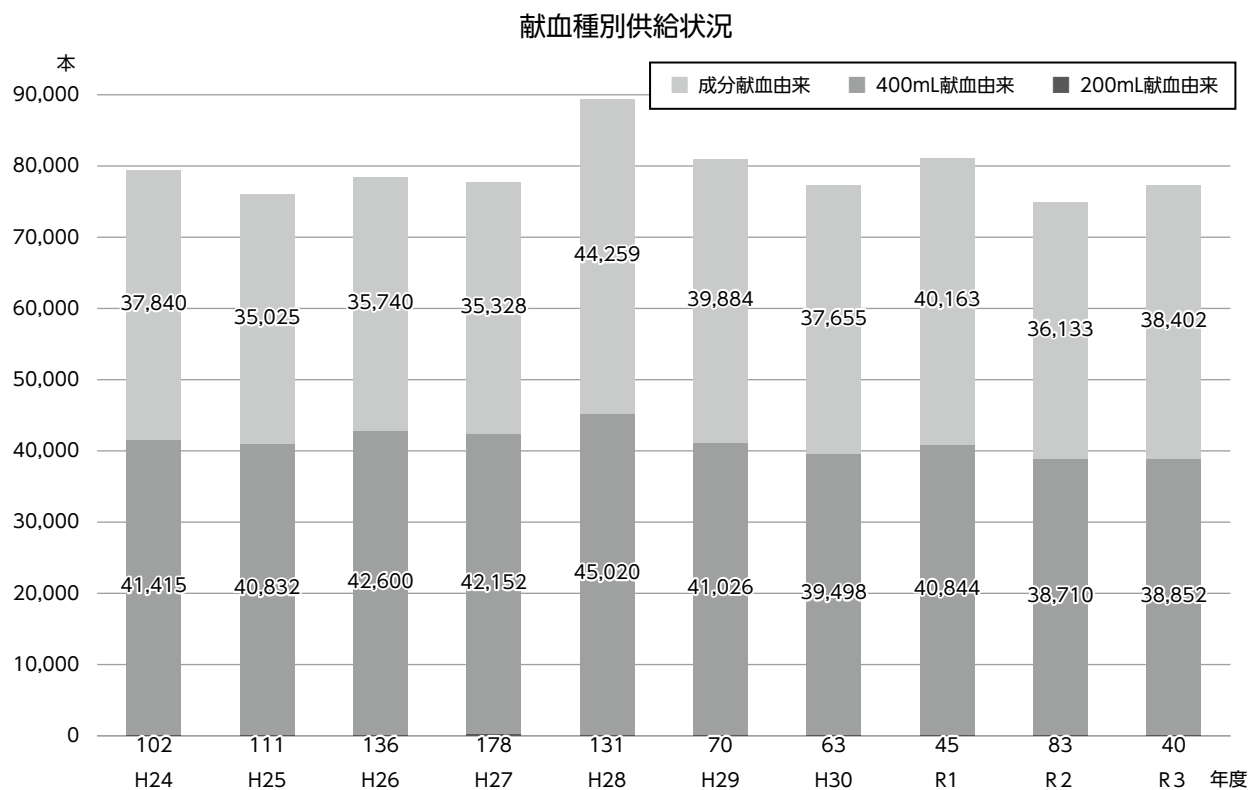
(5) 献血者数の推移（実施場所市町別）

(人)

市町	年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
佐賀市		5,932	5,663	5,326	5,536	5,516	4,874	4,417	4,645	4,897	4,941
多久市		416	374	392	361	454	323	447	311	462	429
小城市		257	343	335	368	226	272	253	170	344	273
神埼市		406	423	391	339	281	282	388	256	290	423
吉野ヶ里町		814	705	723	685	726	809	620	711	711	797
佐賀中部計		7,825	7,508	7,167	7,289	7,203	6,560	6,125	6,093	6,704	6,863
鳥栖市		1,377	1,352	1,240	1,433	1,112	1,200	1,130	1,322	1,578	1,793
基山町		434	338	322	310	297	259	280	235	223	289
みやき町		361	355	348	313	328	325	323	292	258	321
上峰町		131	132	128	133	135	123	116	127	118	149
鳥栖計		2,303	2,177	2,038	2,189	1,872	1,907	1,849	1,976	2,177	2,552
唐津市		1,225	1,307	1,262	1,148	1,206	1,173	901	1,095	1,105	1,357
玄海町		422	428	376	419	164	145	333	358	152	0
唐津計		1,647	1,735	1,638	1,567	1,370	1,318	1,234	1,453	1,257	1,357
伊万里市		1,304	1,330	1,297	1,116	1,204	1,220	1,136	1,146	932	784
有田町		532	490	435	529	487	464	469	430	188	193
伊万里計		1,836	1,820	1,732	1,645	1,691	1,684	1,605	1,576	1,120	977
武雄市		1,290	1,103	1,014	952	856	855	765	884	867	1,136
鹿島市		500	578	512	488	506	481	430	461	536	599
嬉野市		317	326	303	433	471	382	372	346	398	409
大町町		193	162	177	162	143	230	119	101	112	118
江北町		223	260	237	185	219	230	176	188	263	132
白石町		205	197	277	333	271	292	231	148	173	141
太良町		110	118	82	110	51	110	92	97	110	122
杵藤計		2,838	2,744	2,602	2,663	2,517	2,580	2,185	2,225	2,459	2,657
他県		0	68	0	52	0	0	0	0	0	0
献血プラザさが		19,517	19,196	17,373	16,546	16,338	16,700	17,180	17,865	21,432	20,621
合計		35,966	35,248	32,550	31,951	30,991	30,749	30,178	31,188	35,149	35,027

4 血液製剤の供給状況

(1) 血液製剤使用の推移



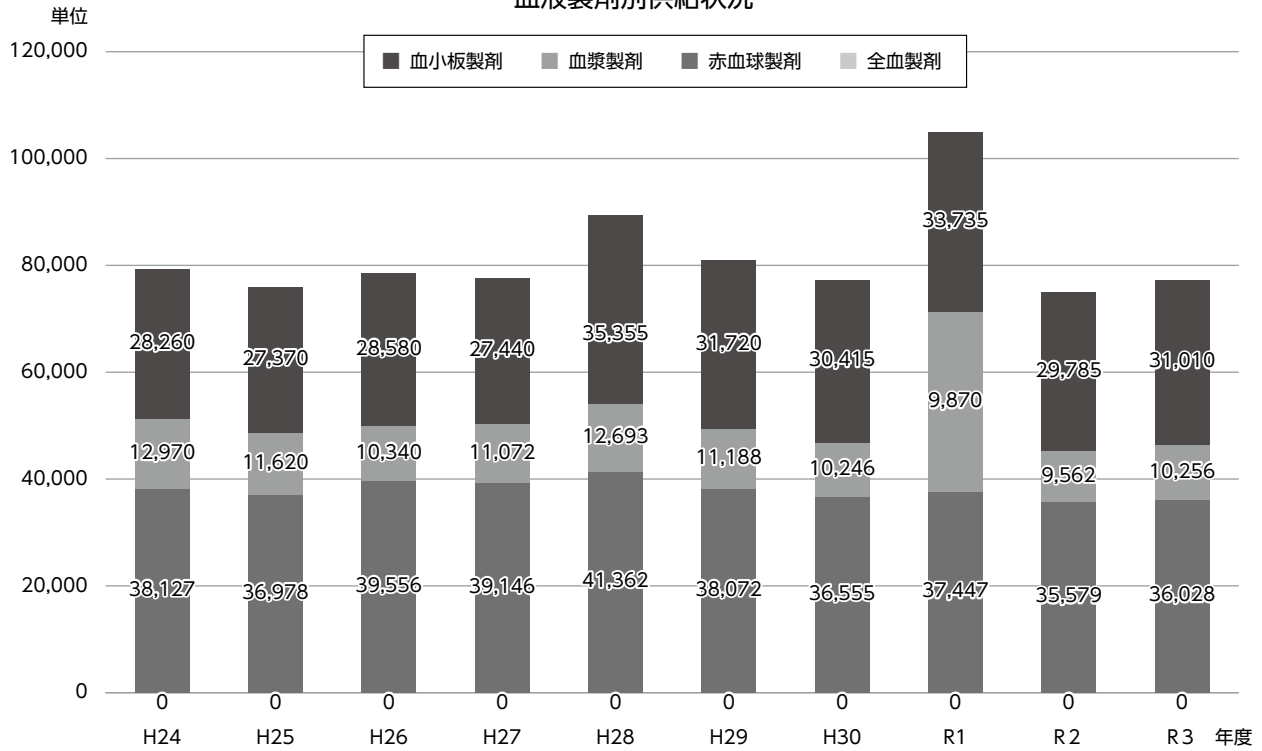
(本)

年度		H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
成分 献血由来	血小板製剤	28,260	27,370	28,580	27,440	35,355	31,720	30,415	33,735	29,785	31,010
	血漿製剤	9,580	7,655	7,160	7,888	8,904	8,164	7,240	6,428	6,348	7,392
	小計	37,840	35,025	35,740	35,328	44,259	39,884	37,655	40,163	36,133	38,402
	構成比(%)	47.7%	46.1%	45.5%	45.5%	49.5%	49.3%	48.8%	49.6%	48.2%	49.7%
400mL 献血由来	血小板製剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	血漿製剤	3,363	3,954	3,174	3,124	3,780	3,016	2,996	3,432	3,196	2,862
	赤血球製剤	38,052	36,878	39,426	39,028	41,240	38,010	36,502	37,412	35,514	35,990
	全血製剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	41,415	40,832	42,600	42,152	45,020	41,026	39,498	40,844	38,710	38,852
	構成比(%)	52.2%	53.8%	54.3%	54.3%	50.4%	50.6%	51.1%	50.4%	51.7%	50.2%
200mL 献血由来	血小板製剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	血漿製剤	27	1	6	60	9	8	10	10	18	2
	赤血球製剤	75	100	130	118	122	62	53	35	65	38
	全血製剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	102	111	136	178	131	70	63	45	83	40
	構成比(%)	0.1%	0.1%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%
合計	血小板製剤	28,260	27,370	28,580	27,440	35,355	31,720	30,415	33,735	29,785	31,010
	血漿製剤	12,970	11,620	10,340	11,072	12,693	11,188	10,246	9,870	9,562	10,256
	赤血球製剤	38,127	36,978	39,556	39,146	41,362	38,072	36,555	37,447	35,579	36,028
	全血製剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	79,357	75,968	78,476	77,658	89,410	80,980	77,216	81,052	74,926	77,294

※血漿製剤に関して平成25年度までは80mLを1単位と換算しており、200mL献血由来から製造される120mL製剤は1.5単位と換算されるため小数点以下が発生。平成26年度より200mL献血由来から製造される120mL製剤は1単位と整理された。

※平成26年5月から県境を越えた血液製剤供給体制の運用開始により福岡県大川・柳川地区を佐賀センターから、鳥栖・基山地区を福岡センターからの供給となる。

血液製剤別供給状況



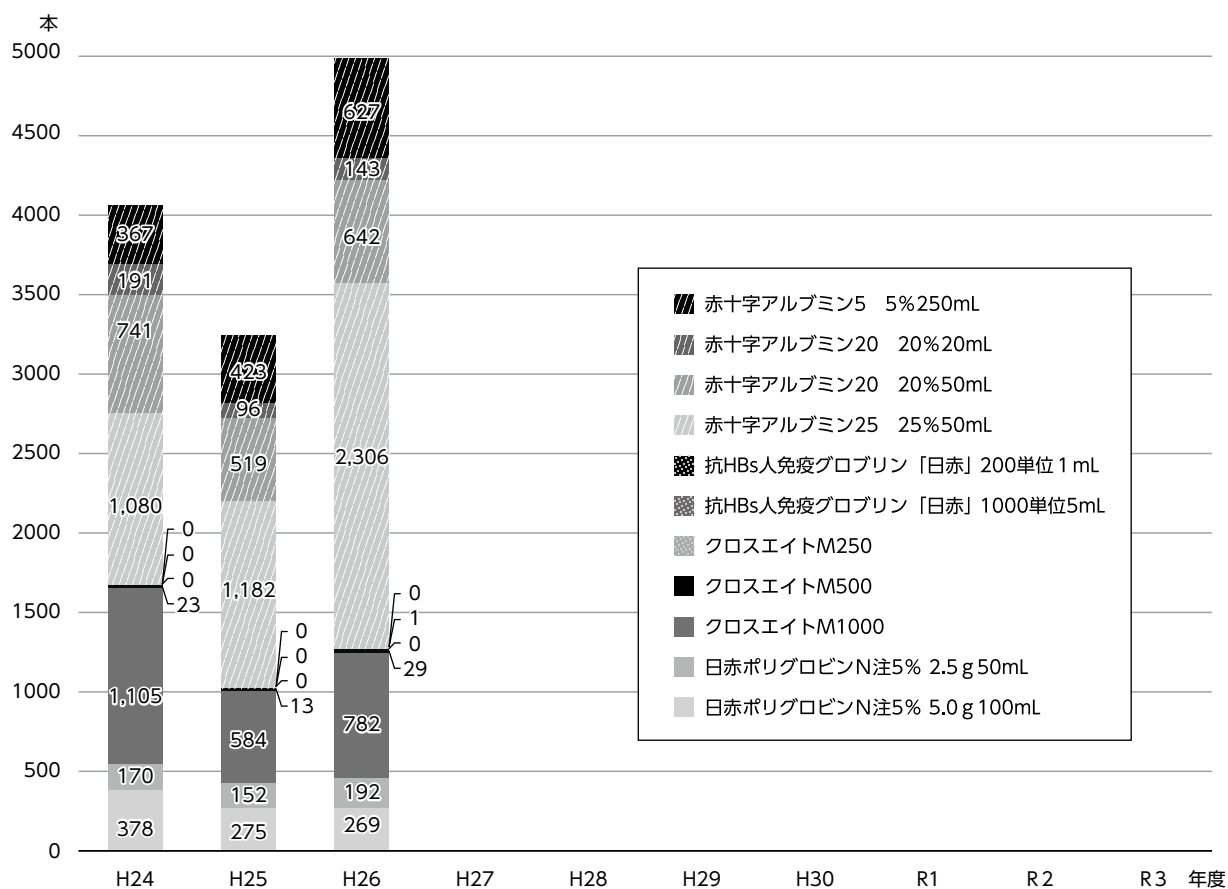
(単位)

年度		H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
血小板製剤	成分献血由来	28,260	27,370	28,580	27,440	35,355	31,720	30,415	33,735	29,785	31,010
	400mL献血由来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	200mL献血由来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	28,260	27,370	28,580	27,440	35,355	31,720	30,415	33,735	29,785	31,010
	構成比(%)	35.6	36.0	36.4	35.3	39.5	39.2	39.4	41.6	39.8	40.1
血漿製剤	成分献血由来	9,580	7,655	7,160	7,888	8,904	8,164	7,240	6,428	6,348	7,392
	400mL献血由来	3,363	3,954	3,174	3,124	3,780	3,016	2,996	3,432	3,196	2,862
	200mL献血由来	27	1	6	60	9	8	10	10	18	2
	小計	12,970	11,620	10,340	11,072	12,693	11,188	10,246	9,870	9,562	10,256
	構成比(%)	16.3	15.3	13.2	14.3	14.2	13.8	13.3	41.6	12.8	13.3
赤血球製剤	400mL献血由来	38,052	36,878	39,426	39,028	41,240	38,010	36,502	37,412	35,514	35,990
	200mL献血由来	75	100	130	118	122	62	53	35	65	38
	小計	38,127	36,978	39,556	39,146	41,362	38,072	36,555	37,447	35,579	36,028
	構成比(%)	48.0	48.7	50.4	50.4	46.3	47.0	47.3	46.2	47.5	46.6
全血製剤	400mL献血由来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	200mL献血由来	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	構成比(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	成分献血由来	37,840	35,025	35,740	35,328	44,259	39,884	37,655	40,163	36,133	38,402
	400mL献血由来	41,415	40,832	42,600	42,152	45,020	41,026	39,498	40,844	38,710	38,852
	200mL献血由来	102	111	136	178	131	70	63	45	83	40
	合計	79,357	75,968	78,476	77,658	89,410	80,980	77,216	81,052	74,926	77,294

※血漿製剤に関して平成25年度までは80mLを1単位と換算しており、200mL献血由来から製造される120mL製剤は1.5単位と換算されるため小数点以下が発生。平成26年度より200mL献血由来から製造される120mL製剤は1単位と整理された。

※平成26年5月から県境を越えた血液製剤供給体制の運用開始により福岡県大川・柳川地区を佐賀センターから、鳥栖・基山地区を福岡センターからの供給となる。

(2) 血漿分画製剤使用の推移



(本)

年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
赤十字アルブミン5 5%250mL	367	423	627							
赤十字アルブミン20 20%20mL	191	96	143							
赤十字アルブミン20 20%50mL	741	519	642							
赤十字アルブミン25 25%50mL	1,080	1,182	2,306							
抗HBs人免疫グロブリン「日赤」 200単位1mL	0	0	0							
抗HBs人免疫グロブリン「日赤」 1000単位5mL	0	0	1							
クロスエイトM250	0	0	0							
クロスエイトM500	23	13	29							
クロスエイトM1000	1,105	584	782							
日赤ポリグロビンN注5% 2.5g50mL	170	152	192							
日赤ポリグロビンN注5% 5.0g100mL	378	275	269							
合計	4,055	3,244	4,991							

※平成26年度をもって血漿分画製剤の製造販売事業はJB(一般社団法人 日本血液製剤機構)に移管。

5 輸血用血液の安全対策

(1) 血液事業におけるIT化

平成18年10月から固定施設のみで行っていたタッチパネル方式での回答を、平成26年5月の新システム導入に合わせて移動採血（献血バス）会場でも導入し、問診業務の電子カルテ化を図りました。

さらに平成30年10月からは、複数回献血クラブ（平成18年設立）の会員サイトをリニューアルし、愛称を「ラブラッド」に統一しました。これにより献血依頼要請の効率化と予約による献血者の利便性が向上しました。加えて平成15年10月から実施している献血者の本人確認についても、平成30年4月から本人確認区分及び運用方法を見直し、本人確認の重要項目を時代に即した「顔写真」、「氏名」及び「生年月日」と決めました。



問診回答用タブレット端末

(2) シャーガス病にかかる安全対策

シャーガス病は、サシガメ（昆虫）に媒介されて、原虫（クルーズトリパノソーマ）が感染する病気です。

輸血感染を防ぐため平成24年10月からシャーガス病に対する安全対策の対象条件（流行地である中南米地域の対象国・地域に居住または滞在されたなど）に該当する方の献血血液は輸血用血液製剤の原料血液としては使用せず、血漿分画製剤用の原料血液として活用することにしました。

その後、疫学調査結果を踏まえ、平成28年8月からはシャーガス病に対する安全対策の対象条件に該当する方のすべての献血血液に対し、シャーガス病の抗体検査（T.cruzi抗体検査）を導入しました。

この検査により安全性が確認された献血血液については、輸血用血液製剤の原料血液としても活用することになりました。

シャーガス病に対する安全対策へのご協力をお願い

下記1～3のいずれかに該当する方は、職員にお申し出ください。

1. 中南米諸国で生まれた、又は育った。
2. 母親又は母方の祖母が、中南米諸国で生まれた、又は育った。
3. 中南米諸国に連続4週間以上滞在又は居住したことがある。

なお、いただいた血液はシャーガス病の抗体検査（T.cruzi抗体検査）を実施し、安全性が確認された血液については、輸血用血液製剤又は血漿分画製剤用の原料血漿として、使用させていただきます。

また、以下に該当する方は、シャーガス病の輸血感染を防止するため、献血をご遠慮いただきますようお願いいたします。

上記1～3のいずれかに該当する方で、
中南米地域の対象国・地域を離れてから6ヵ月以上経過していない方。



※シャーガス病とは、メキシコを含む中南米に分布地をもつ寄生性原虫（原虫）に感染されて、発症する病気です。日本にはこの原虫を媒介するサシガメがいないと見られており、感染、発症のリスクが非常に低いとされています。

詳しくはこちら 日本赤十字社 献血

日本赤十字社
Japan Red Cross Society

(3) 輸血用血液製剤の変遷

- ・医薬品製造承認及び承認事項の一部変更について
- ・平成16年以降の輸血用血液製剤の変遷

全血製剤（販売名） 人全血液（一般的名称）

昭和27年4月 日赤保存血液 血液保存液：ACD-B液、ACD-A液 容器：瓶（びん） 保存血液（昭和35年～） 昭和46年に「生物学的製剤基準」制定 昭和47年「保存血液」が日本薬局方に収載 当時、局方品は承認不要医薬品 →「製造品目追加許可」に切り替え

昭和45年1月 保存血液 血液保存液：ACD-A液 容器：塩化ビニル樹脂製バッグ 血液セット入り 保存血液

昭和48年1月 ヘパリン加新鮮血液 抗凝固剤：ヘパリン 有効期間：採血後24時間以内 A・C・D加新鮮血液 血液保存液：ACD-A液 C・P・D加新鮮血液 血液保存液：CPD液 -

昭和56年3月 保存血液「日赤」 血液保存液：ACD-A液 保存血液CPD「日赤」 血液保存液：CPD液 保存血液「薬事法」改正により局方品でも製造承認が必要になり、改めて承認を取得 ※昭和58年4月1日からは、すべてCPD液に変更

昭和61年3月 400mL献血由来を追加（製造承認一部変更）

平成5年11月 人全血液ACD「日赤」 人全血液CPD「日赤」 人全血液 平成5年10月「生物学的製剤基準」改正 一般的名称「保存血液」→「人全血液」「販売名変更代替新規製剤」

平成10年4月 照射人全血液CPD「日赤」 輸血後移植片対宿主病（GVHD）防止のために放射線照射した製剤追加

平成18年10月 人全血液-LR「日赤」 照射人全血液-LR「日赤」 血液保存液：CPD液 全血献血由来製剤への保存前白血球除去 実施 有効期間：採血後72時間以内 全血製剤（医薬品製造承認・承認事項一部変更内容） ※引用「血液事業のあゆみ」 有効期間：採血後21日間 当時、採血後4～6℃で4日間（72時間～96時間）保存したものを保存血液、これより短いものを新鮮血液としていた。 ※保存期間の規定があった。 保存期間の規定も撤廃 有効期間：採血後21日間 貯法：2～6℃

赤血球製剤（販売名） 人赤血球液（一般的名称）

昭和41年6月 赤血球沈層 ヒト血液（200mL）から血漿を大部分除去した（採血後24時間以内）赤血球製剤 容器：採血瓶（びん） 有効期間：採血日から10日以内 人赤血球沈層 人血漿製造の際の副産物として基準化されていた 人赤血球濃厚液（昭和46年～）「生物学的製剤基準」が制定された際に、一般的名称が変更

昭和48年1月 新鮮赤血球沈層 容器：採血瓶（びん） 有効期間：血漿除去後24時間以内 - ヒト血液（200mL）から血漿を大部分除去した（採血後24時間以内）新鮮な赤血球製剤

昭和51年4月 赤血球濃厚液「日赤」バッグ 容器：採血バッグ 血液保存液：ACD-A液またはCPD液 有効期間：採血後21日間 - 採血バッグを用いて製造した赤血球製剤。 有効期間の延長（採血後24時間→21日間）

- 昭和61年3月 濃厚赤血球「日赤」 血液保存液：ACD-A液またはCPD液 有効期間：採血後21日間
人赤血球濃厚液 400mL献血由来追加。 血液保存液と混和した全血を、ダブルバッグ又はトリプル バッグで、赤血球と乏血小板血漿又は多血小板血漿に分離して調製
- 平成4年1月 赤血球M・A・P「日赤」 血液保存液：ACD-A液又はCPD液 有効期間：採血後42日間
血液保存液と混和した全血を、バフィーコート法によって血漿と分離した赤血球層に、赤血球保存用添加液（MAP液）を添加した製剤
- 平成7年4月 有効期間の短縮 採血後42日→採血後21日間
- 平成10年4月 照射赤血球M・A・P「日赤」 血液保存液：ACD-A液 輸血後移植片対宿主病（GVHD）防止のために放射線照射した製剤追加
- 平成18年10月 赤血球濃厚液-LR「日赤」 照射赤血球濃厚液-LR「日赤」 血液保存液：CPD液 全血献血由来製剤への保存前白血球除去実施
- 平成25年11月 赤血球液-LR「日赤」 照射赤血球液-LR「日赤」 人赤血球液 「生物学的製剤基準」改正による一般的名称変更 赤血球製剤（一次製剤） 代替新規製剤 承認事項一部変更 代替新規製剤（医薬品製造承認・承認事項一部変更内容） ※引用「血液事業のあゆみ」
400mL献血由来 製剤追加

血漿製剤（販売名） 新鮮凍結血漿（一般的名称）

- 昭和38年8月 人血漿（液状） 容量：50mL、100mL 有効期間：採血日から18か月 保存温度：15～30℃ 人血漿（液状）（昭和43年10月）製造承認事項一部変更 200献血由来を追加 液状人血漿（昭和46年～）（昭和46年）製造承認事項一部変更 「生物学的製剤基準」が制定された際に、一般的名称が変更（昭和47年）製造承認事項一部変更 防腐剤の添加を廃止、容量を100mLのみに変更
- 昭和48年1月 新鮮液状血漿「日赤」 有効期間：製造後12時間 - （昭和61年3月）製造承認事項一部変更 400mL献血由来を追加（昭和62年5月）製造承認事項一部変更 成分献血由来を追加 クリオプレシピテート「日赤」 - ヒト血漿中の血液凝固第Ⅷ因子100単位を凍結させたもの
- 昭和46年4月 新鮮凍結血漿「日赤」 容量：80mL、160mL 有効期間：採血後1年間 新鮮凍結血漿（昭和61年3月）製造承認事項一部変更 400mL献血由来を追加（昭和62年5月）製造承認事項一部変更 成分献血由来を追加（平成20年11月）製造承認事項一部変更 全血献血由来製剤（80mL、160mL）の削除に伴う記載整備
- 平成18年10月 新鮮凍結血漿-LR「日赤」 容量：120mL、240mL 全血献血由来製剤への保存前白血球除去。 容量変更（80→120mL、120mL→240mL）
- 平成21年3月 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血 新鮮凍結血漿「日赤」の販売名変更代替新規製剤 販売名に成分由来であること、白血球除去されていることを示すLRを付した
- 平成24年7月8日 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480 販売名変更代替新規製剤 ・販売名に容量の目安を付した ・成分献血由来は、200mL献血由来の整数倍とし、その 容量の目安を付した 血漿製剤 血漿に5%ブドウ糖液を加えたもの。 ※防腐剤として、10,000倍以下のエチル水銀チオサリチル酸ソー

タ酸又は 15000倍以下のフェニール水銀硝酸塩を加えることも可能 ヒト血液200mLより分離し凍結した 血漿 人血液200mLを採血後4時間以内に分離した血漿 FFP (医薬品製造承認・承認事項一部変更内容) ※引用「血液事業のあゆみ」

血小板製剤 (販売名) 人血小板濃厚液 (一般的名称)

昭和46年11月 濃縮血小板血漿 容量: 1単位 (約20mL) 2単位 (約40mL) 5単位 (100mL) 有効期間: 血小板分離後6時間以内 貯蔵温度: 15~25℃ (昭和50年業務標準では22℃) - 200mL献血由来の新鮮な人血漿を分離し、その中のヒト血小板を1単位20mLの血漿中に濃縮したもの (昭和59年10月) 製造承認事項一部変更 有効期間: 採血後48時間 貯蔵温度: 20~24℃ 振盪保存

昭和61年3月 濃厚血小板「日赤」 (平成2年) 15、20単位追加 濃厚血小板HLA「日赤」 - (昭和62年7月) 製造承認事項一部変更 有効期間: 採血後72時間 人血小板濃厚液 (平成5年10月) 「生物学製剤基準」に一般的名称「人血小板濃厚液」が収載 (平成19年11月) 製造承認事項一部変更 有効期間: 採血後4日間

平成10年4月 照射濃厚血小板「日赤」 照射濃厚血小板HLA「日赤」 有効期間: 採血後72時間 輸血後移植片対宿主病 (GVHD) 防止のために放射線照射した製剤追加 (平成19年11月) 製造承認事項一部変更 有効期間: 採血後4日間

平成21年3月 濃厚血小板-LR「日赤」 照射濃厚血小板-LR「日赤」 濃厚血小板HLA-LR「日赤」 照射濃厚血小板HLA-LR「日赤」 有効期間: 採血後4日間 保管温度: 20~24℃ 販売名変更代替新規製剤 販売名に白血球除去されていることを示すLRを付した製剤

平成28年3月 照射洗浄血小板-LR「日赤」 照射洗浄血小板HLA-LR「日赤」 有効期間: 製造後48時間 (※採血後4日間を超えない) 保管温度: 20~24℃ 医薬品製造販売承認取得 照射濃厚血小板 (HLA) -LR「日赤」を血小板浮遊液で洗浄し、同液に浮遊した製剤

血小板製剤 販売名を変更し、400mL献血由来及び 成分献血由来 (5,10単位) を追加。 患者HLA型に適合した成分献血由来製剤 昭和52年に削除 PC (医薬品製造承認・承認事項一部変更内容) ※引用「血液事業のあゆみ」 平成16年以降の輸血用血液製剤 成分採血装置による白除 1,2単位PCはすべて成分採血由来からの分割製造となる 成分採血装置による白除 あらたに医薬品製造販売承認取得 販売名、略号に 「LR」 赤血球M・A・P「日赤」等は 供給停止 FFP-LR1 (120mL) FFP-LR2 (240mL) 従来の1.5倍容量 成分献血由来の製剤はすでに白血球除去されていたが、販売名はそのまま 平成16年10月から白除は実施されていたが、ここでようやく販売名が変更 ・調製時の添加液量の変更 ・有効期間変更 容量を明記 容量120mLの整数倍 (480mL) に変更 生物学的製剤基準の改正に伴う変更 (一般的名称) 人赤血球液 略号も変更 RCC-LR→RBC-LR 2

6 献血思想の普及

平成 24 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成24年7月1日(日)・7日(土)・8日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：ゆめタウン武雄・フレスポ鳥栖・
ゆめタウン佐賀

②第48回献血運動推進全国大会

期 日：平成24年7月24日(火)
主 催：厚生労働省・日本赤十字社・滋賀県
場 所：滋賀県大津市

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成24年7月29日(日)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター
表 彰：厚生労働大臣表彰 2団体
厚生労働大臣感謝状 4団体
佐賀県知事感謝状 4団体
金色有功章 3団体
銀色有功章 14団体
佐賀県支部長感謝状 10団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成24年12月1日(土)・15日(土)・16日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：フレスポ鳥栖・メリーランド武雄ボウリングセ
ンター ゆめタウン佐賀

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成25年1月14日(月・祝)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

小学生対象：2回、高校生対象：9回、
専門学校生対象：1回
場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,022人



平成 25 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成25年7月9日(火)・14日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：フレスポ鳥栖・ゆめタウン佐賀・
ゆめタウン武雄

②第49回献血運動推進全国大会

期 日：平成25年7月5日(金)
主 催：厚生労働省・日本赤十字社・福岡県
場 所：福岡県福岡市

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成25年7月21日(日)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター
表 彰：厚生労働大臣表彰 1団体
厚生労働大臣感謝状 3団体
佐賀県知事感謝状 4団体
金色有功章 1団体
銀色有功章 13団体
佐賀県支部長感謝状 10団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成25年12月1日(日)・14日(土)・
15日(日)・19日(木)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：フレスポ鳥栖・メリーランド武雄ボウリングセ
ンター・ゆめタウン佐賀・献血プラザさが

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成26年1月13日(月・祝)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

小学生対象：1回、中学生対象：1回、
高校生対象：9回、専門学校生対象：2回
場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,157人



平成26年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成26年7月5日(土)・6日(日)・13日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：ジャスコ唐津店・ゆめタウン佐賀・
フレスポ鳥栖

②第50回献血運動推進全国大会

期 日：平成26年7月10日(木)
主 催：厚生労働省・日本赤十字社・愛知県
場 所：愛知県名古屋市中区

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成26年7月21日(月・祝)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター
表 彰：厚生労働大臣表彰 1 団体
厚生労働大臣感謝状 1 団体
佐賀県知事感謝状 2 団体
金色有功章 2 団体
銀色有功章 10 団体
佐賀県支部長感謝状 8 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成26年12月7日(日)・14日(日)・21日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：フレスポ鳥栖・基山町公民館・ゆめタウン佐賀

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成27年1月12日(月・祝・祝)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

小学生対象：2 回、高校生対象：8 回、
専門学校生対象：3 回
場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,063人



平成27年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成27年7月5日(日)・12日(日)・8月9日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：フレスポ鳥栖・ジャスコ唐津店・ゆめタウン佐賀

②第51回献血運動推進全国大会(台風接近に伴う中止)

期 日：平成27年7月17日(金)
主 催：厚生労働省・日本赤十字社・大阪府
場 所：大阪府大阪市

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成27年7月19日(日)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター
表 彰：厚生労働大臣表彰 2 団体
厚生労働大臣感謝状 4 団体
佐賀県知事感謝状 2 団体
金色有功章 3 団体
銀色有功章 10 団体
佐賀県支部長感謝状 12 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成27年12月12日(土)・13日(日)
主 催：佐賀県学生献血推進協議会
場 所：牛津セリオショッピングセンター・
メリーランド武雄ボウリングセンター

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成28年1月11日(月・祝)
場 所：ゆめタウン佐賀
主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

小学生対象：1 回、高校生対象：8 回、専門学校生対象：2 回
場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,323人

②卒業献血

参加高校：4 校 献血者数：298名

③職場体験

参加中学校：4 校 参加人数：17名



平成28年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成28年7月10日(日)・8月7日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：ジャスコ唐津店・ゆめタウン佐賀

②第52回献血運動推進全国大会

期 日：平成28年7月7日(木)

主 催：厚生労働省・日本赤十字社・東京都

場 所：東京都渋谷区

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成28年7月24日(日)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター表 彰：厚生労働大臣表彰 2団体
厚生労働大臣感謝状 4団体
佐賀県知事感謝状 2団体
金色有功章 5団体
銀色有功章 9団体
佐賀県支部長感謝状 14団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成28年12月11日(日)・18日(日)・23日(金・祝)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：基山町公民館・ゆめタウン佐賀・フレスポ鳥栖

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成29年1月9日(月・祝)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

高校生対象：14回、専門学校生対象：2回、

大学生対象：1回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,910人

②職場体験

参加中学校：4校

参加人数：14名



平成29年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成29年8月6日(日)・20日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：フレスポ鳥栖・ゆめタウン佐賀

②第53回献血運動推進全国大会

期 日：平成29年7月12日(水)

主 催：厚生労働省・日本赤十字社・秋田県

場 所：秋田県秋田市

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成29年7月29日(土)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター表 彰：厚生労働大臣表彰 1団体
厚生労働大臣感謝状 2団体
佐賀県知事感謝状 2団体
日本赤十字社創立140周年記念社業功労者社長
特別表彰 1団体
金色有功章 5団体
銀色有功章 5団体
佐賀県支部長感謝状 17団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成29年12月3日(日)・17日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：イオン唐津ショッピングセンター・
ゆめタウン佐賀

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成30年1月8日(月・祝)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

中学生対象：4回、高校生対象：16回、

専門学校生対象：2回、大学生対象：2回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：3,852人

②職場体験

参加中学校：5校 参加人数：20名



平成 30 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：平成30年7月14日(土)・22日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：フレスポ鳥栖・ゆめタウン佐賀

②第54回献血運動推進全国大会

(西日本豪雨の影響により中止)

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：平成30年7月22日(日)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

表 彰：厚生労働大臣表彰 1 団体
厚生労働大臣感謝状 3 団体
佐賀県知事感謝状 2 団体
金色有功章 5 団体
銀色有功章 3 団体
佐賀県支部長感謝状 11 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：平成30年12月2日(日)・9日(日)・16日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：フレスポ鳥栖・基山町公民館・ゆめタウン佐賀

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：平成31年1月14日(月・祝)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

高校生対象：17回、

専門学校生対象：1 回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：3,428人

②職場体験

参加中学校：4 校

参加人数：14名



令和 元 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：令和元年7月13日(土)・8月18日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：フレスポ鳥栖・ゆめタウン佐賀

②第55回献血運動推進全国大会

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により中止)

③「献血功労者表彰式」・「献血ふれあいフェスタ」

期 日：令和元年7月21日(日)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

表 彰：厚生労働大臣表彰 1 団体
厚生労働大臣感謝状 3 団体
佐賀県知事感謝状 1 団体
金色有功章 5 団体
銀色有功章 3 団体
佐賀県支部長感謝状 4 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：令和元年12月1日(日)・8日(日)・15日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：フレスポ鳥栖・基山町民会館・ゆめタウン佐賀

⑤「はたちの献血」キャンペーン

期 日：令和2年1月13日(月・祝)

場 所：ゆめタウン佐賀

主 催：佐賀県・日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

高校生対象：14回、

専門学校生対象：2 回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他
参加総数：2,706人

②職場体験

参加中学校：5 校

参加人数：18名

③キッズ献血

参加小学校：11校

参加人数：17名



令和 2 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により中止)

②第56回献血運動推進全国大会

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により中止)

③献血功労者表彰式

期 日：令和2年7月28日(火)

場 所：佐賀県庁

主 催：佐賀県

表 彰：厚生労働大臣表彰 1 団体
厚生労働大臣感謝状 2 団体
佐賀県知事感謝状 1 団体

期 日：令和2年7月30日(木)

場 所：日本赤十字社佐賀県支部

主 催：日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター表 彰：金色有功章 3 団体
銀色有功章 3 団体
佐賀県支部長感謝状 4 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：令和2年12月13日(日)・20日(日)・27日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：基山町保健センター・ゆめタウン佐賀・
フレスポ鳥栖

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

高校生対象：10回、

専門学校生対象：2回、

大学生対象：1回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他

参加人数：2,148人



お庭献血 (コロナ対策)

令和 3 年度

(1) 献血キャンペーン活動等イベント事業

①「サマー献血」キャンペーン

期 日：令和3年8月22日(日)・29日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：ゆめタウン佐賀・フレスポ鳥栖

②第57回献血運動推進全国大会

(新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により中止)

③「献血功労者表彰式」

期 日：令和3年11月10日(水)

場 所：佐賀県庁

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

表 彰：厚生労働大臣表彰 1 団体
厚生労働大臣感謝状 2 団体
佐賀県知事感謝状 1 団体

期 日：令和3年11月17日(水)

場 所：日本赤十字社佐賀県支部

主 催：日本赤十字社佐賀県支部・
佐賀県赤十字血液センター表 彰：金色有功章 5 団体
銀色有功章 7 団体
佐賀県支部長感謝状 8 団体

④「全国学生クリスマス献血」キャンペーン

期 日：令和3年12月12日(日)・19日(日)・26日(日)

主 催：佐賀県学生献血推進協議会

場 所：基山町公民館・ゆめタウン佐賀・フレスポ鳥栖

(2) 若年層に対する啓発

①献血教室

高校生対象：15回、

専門学校生対象：3回、

大学生対象：6回

場 所：佐賀県赤十字血液センター、各学校、他

参加総数：3,024人

②卒業献血

参加高校：7校

献血者数：232名

③学内献血

参加大学・専門学校：6校

献血者数：562名



ハロウィン献血

7 献血表彰の実施

献血事業に功勞のあった個人・団体に対して国・県・日本赤十字社は表彰および感謝状を贈っています。
(敬称略)

(1) 厚生労働大臣表彰受賞団体

【厚生労働大臣表彰状】

年度	団体数	受賞団体
H24	2	佐賀若楠ライオンズクラブ 鹿島機械工業株式会社
H25	1	佐賀コンピュータ専門学校
H26	1	国立大学法人 佐賀大学 医学部
H27	2	牛津製薬株式会社 佐賀葉がくれライオンズクラブ
H28	2	基山ライオンズクラブ 株式会社伊万里鉄工所
H29	1	鹿島ライオンズクラブ
H30	1	佐賀県農業協同組合 白石地区
R 1	1	佐賀大和工業団地協同組合
R 2	1	九州電力株式会社佐賀支社
R 3	1	鳥栖ライオンズクラブ

【厚生労働大臣感謝状】

年度	団体数	受賞団体
H24	4	学校法人 江楠学園 佐賀工業専門学校 鳥栖養基ライオンズクラブ 多久ライオンズクラブ 鹿島印刷株式会社
H25	3	佐賀県学生献血推進協議会 社会保険浦之崎病院 森鉄工株式会社
H26	1	オムロンリレーアンドデバイス株式会社 武雄営業所
H27	4	福博印刷株式会社 宮島醤油株式会社 妙見工場 株式会社協電カットコア製作所 佐藤食品工業株式会社 佐賀工場
H28	4	一般社団法人 佐賀県LPガス協会 青年部 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用 支援機構佐賀支部 佐賀職業能力開 発促進センター 唐津警察署 株式会社 西村鐵工所

H29	2	公益社団法人 武雄法人会 伊万里信用金庫
H30	3	三養基ライオンズクラブ 佐賀中央ライオンズクラブ 佐賀西ライオンズクラブ
R 1	3	佐賀北ライオンズクラブ 佐賀第一ライオンズクラブ 株式会社ツインスター
R 2	2	神埼ライオンズクラブ 佐賀北警察署
R 3	2	田中鉄工株式会社 杵島ライオンズクラブ

(2) 佐賀県知事感謝状受賞団体

年度	団体数	受賞団体
H24	4	佐賀中央ライオンズクラブ 佐賀ライオンズクラブ フレスポ鳥栖 三養基ライオンズクラブ
H25	4	佐賀第一ライオンズクラブ 佐賀北ライオンズクラブ 佐賀西ライオンズクラブ 神埼ライオンズクラブ
H26	2	昭栄化学工業株式会社 鳥栖事業所 九州ひぜん信用金庫
H27	2	佐賀信用金庫 唐津農業協同組合
H28	2	一般社団法人 佐賀県農協会館 株式会社中山鉄工所
H29	2	佐賀北警察署 日東工業株式会社唐津工場
H30	2	一般社団法人 杵島建設業協会 ジョイソン・セイフティ・システムズ・ 九州株式会社
R 1	1	中国塗料株式会社九州工場
R 2	1	株式会社ゴール九州工場
R 3	1	佐賀整肢学園こども発達医療センター

(3) 日本赤十字社有功章受章団体

【金色有功章（活動20年以上）】

年度	団体数	受賞団体
H24	3	社団法人伊万里青年会議所 伊万里ライオンズクラブ 公益社団法人 全日本司厨士協会西日本地方佐賀県支部
H25	1	佐賀大和工業団地協同組合
H26	2	医療法人財団友朋会 嬉野温泉病院 佐賀県立佐賀工業高等学校
H27	3	唐津ライオンズクラブ 唐津レインボーライオンズクラブ 九州電力株式会社 佐賀支社
H28	5	肥前有田ライオンズクラブ 鳥栖ライオンズクラブ 株式会社ヤクルト本社 佐賀工場 東洋製罐株式会社 基山工場 九州電力株式会社 玄海原子力発電所
H29	5	株式会社東洋空機製作所 九州住電精密株式会社 株式会社佐賀鉄工所 佐賀工場 株式会社佐賀鉄工所 大町工場 唐津市消防団浜玉支団
H30	5	久光製薬株式会社 九州本社 武雄ライオンズクラブ ニシム電子工業株式会社 佐賀工場 宮島醤油株式会社 多久ライオンズクラブ
R 1	5	株式会社ニチノサービス佐賀事業所 学校法人江楠学園佐賀工業専門学校 佐賀県警察本部 大電株式会社佐賀事業所 学校法人龍谷学園龍谷高等学校
R 2	3	佐賀県農業大学校 西日本電気鉄工労働組合 基山ライオンズクラブ
R 3	5	王子マテリア株式会社佐賀工場 昭和自動車株式会社 武雄ロータリークラブ 杵島地区消防本部鹿島消防署 森鉄工株式会社

【銀色有功章（活動15年以上）】

年度	団体数	受賞団体
H24	14	佐賀中央郵便局 株式会社佐賀鉄工所 学校法人佐賀電波学園 佐賀工業専門学校 大電株式会社 佐賀事業所 大和製罐株式会社 九州工場 九州電力株式会社 唐津発電所 鎮西町消防団 株式会社伊万里鉄工所 有田焼工業協同組合 株式会社東洋空機製作所 杵島工場 株式会社佐賀鉄工所 大町工場 JAさが白石地区統括支所 JAさが鹿島中央支所 株式会社九州INAX
H25	13	社団法人佐賀青年会議所 佐賀市役所 東与賀支所 株式会社ヤクルト本社 佐賀工場 学校法人永原学園 西九州大学 佐賀エレクトロニクス株式会社 佐賀製作所 株式会社唐津鐵工所 唐津市役所 北波多支所 武雄市役所 山内支所 武雄市役所 北方支所 鹿島市役所 祐徳薬品工業株式会社 東亜工機株式会社 嬉野市役所 本庁
H26	10	佐賀地方裁判所 九州農政局 佐賀農政事務所 株式会社戸上メタリックス 佐賀工場団地協同組合 佐賀大学 医学部 千代田町消防団 牛津製薬株式会社 社団法人陶都有田青年会議所 特定医療法人静便堂 白石共立病院 鹿島機械工業株式会社
H27	10	佐賀若楠ライオンズクラブ

		学校法人佐賀コンピュータ学院 佐賀コンピュータ専門学校
		味の素株式会社 九州事業所
		王子板紙株式会社 佐賀工場
		大塚製薬株式会社 佐賀工場
		株式会社ブリヂストン 鳥栖工場
		NOKグループユニオン 佐賀支部
		株式会社SUMCO 伊万里事業所
		株式会社SUMCO 佐賀事業所
		株式会社神近建設
H28	9	佐賀葉がくれライオンズクラブ 鳥栖ライオンズクラブ パナソニックコミュニケーションズ 株式会社 佐賀事業所 多久ライオンズクラブ 多久市商工会 青年部 唐津ライオンズクラブ 唐津レインボーライオンズクラブ 浜玉町消防団 肥前有田ライオンズクラブ
H29	5	福博印刷株式会社 全国不知火連合パーソナル無線献血促進会 グリコ協同乳業株式会社 佐賀工場 キューピー株式会社 鳥栖工場 鹿島印刷株式会社
H30	3	佐賀警察署 昭和自動車株式会社 森鉄工株式会社
R 1	3	鳥栖養基ライオンズクラブ フレスポ鳥栖 一般社団法人佐賀県農協会館
R 2	3	株式会社佐賀銀行 佐賀信用金庫 唐津農業協同組合
R 3	7	佐賀県学生献血推進協議会 宮島醤油株式会社妙見工場 嬉野ライオンズクラブ 大電株式会社上峰事業所 第一生命保険株式会社佐賀支社 株式会社イズミゆめタウン武雄 佐賀県立佐賀農業高等学校

(4) 日本赤十字社創立140周年記念社業功労者
社長特別表彰 受賞団体

年度	団体数	受賞団体
H29	1	株式会社戸上電機製作所

(5) 日本赤十字社佐賀県支部長感謝状受賞団体
【支部長感謝状（活動10年以上）】

年度	団体数	受賞団体
H24	5	神埼ロータリークラブ 学校法人 九州アカデミー学園 九州医療専門学校 田代キャンパス 佐賀県立多久高等学校 伊万里信用金庫 公益社団法人 武雄法人会
H25	5	住友生命保険相互会社 佐賀支社 明治安田生命保険相互会社 佐賀支社 西有田ライオンズクラブ 武雄中央ライオンズクラブ 一般社団法人 杵島建設業協会
H26	4	社団法人佐賀県宅地建物取引業協会 杵藤支部 社団法人佐賀県宅地建物取引業協会 鳥栖三神支部 大電株式会社 上峰事業所 立正佼成会唐津教会 青年部
H27	6	嬉野ライオンズクラブ 杵島ライオンズクラブ 鳥栖警察署 西日本高速道路株式会社 九州支社 佐賀高速道路事務所 佐賀広域消防局 第一生命保険株式会社 佐賀支社
H28	7	医療法人 春陽会 佐賀県警察学校 日本生命保険相互会社 佐賀支社 大同生命保険株式会社 佐賀支社 富国生命保険相互会社 佐賀支社 ジブラルタ生命保険株式会社 佐賀支社 三井生命保険株式会社 佐賀支社
H29	10	株式会社イズミゆめタウン佐賀 株式会社NTTフィールドテクノ九州 支店佐賀営業所

		佐賀ドリームライオンズクラブ 佐賀市医師会立看護専門学校 株式会社佐電工 佐賀市上下水道局 唐津キャスルライオンズクラブ 青年の日実行委員会 鳥栖中央ライオンズクラブ 鹿島藤津地区薬剤師会			武雄御船ライオンズクラブ 有限会社 武雄ボウリングセンター
H30	8	学校法人 九州アカデミー学園 武雄御船ライオンズクラブ 有限会社武雄ボウリングセンター 九州セキスイハイム工業株式会社 アクサ生命保険株式会社 佐賀支社 朝日生命保険相互会社 西九州支社 アフラック生命保険株式会社 佐賀支社 佐賀県立総合看護学院	H26	4	株式会社ソクト マリトピア会 医療法人順天堂 社会福祉法人光風会 特別養護老人ホーム光風荘
R 1	4	株式会社NEOMAX九州 伊万里警察署 九州製鋼株式会社佐賀工場 三菱ふそうトラック・バス株式会社 九州ふそう久留米支店	H27	6	小城天山ライオンズクラブ 株式会社タイラベストビート 佐賀県電気工事業工業組合青年部会 協同組合クレオパーク鍋島 株式会社モトシマ 佐賀県土地改良会館管理委員会
R 2	3	佐賀第2合同庁舎 協同組合クレオパーク鍋島 株式会社協電カットコア製作所	H28	7	佐賀東信用組合 株式会社ミゾタ 川副事業所 一般社団法人 建設業協会 一般社団法人 佐賀県損害保険代理業協会 田中電子工業株式会社 一般社団法人 巨樹の会新武雄病院 鹿島商工会議所
R 3	5	九州ひぜん信用金庫 小城天山ライオンズクラブ 一般社団法人建設業協会佐賀 田中電子工業株式会社 一般社団法人巨樹の会新武雄病院	H29	7	大和ハウス工業株式会社 佐賀支店 宗教法人真如苑 佐賀支部 株式会社 かんぽ生命保険 佐賀支店 株式会社森光商店 株式会社佐賀鉄工所 多久工場 株式会社まいづる百貨店まいづるスリーナイン店 株式会社フタバ九州伊万里工場
			H30	3	株式会社 政工務店 一般社団法人 生命保険協会 佐賀県協会 損保ジャパン日本興亜ひまわり生命保険株式会社 佐賀営業支社

【支部長感謝状（活動5年以上）】

年度	団体数	受賞団体
H24	5	株式会社イズミ ゆめタウン佐賀 唐津キャスルライオンズクラブ 唐津ライオネスクラブ ボランティア団体 クローバー 九州製鋼株式会社 佐賀工場
H25	5	一般社団法人 佐賀県薬剤師会 学校法人九州アカデミー学園 九州医療専門学校 松原キャンパス 株式会社まいづる百貨店 まいづる9呼子店

R 1	—	—
R 2	1	鳥栖保健福祉事務所
R 3	3	武雄間税会 東京海上日動あんしん生命株式会社 佐賀生保支社 三井住友海上あいおい生命保険株式会社 佐賀生保支社

8 医薬情報活動の実施

薬事法の定めるところにより、全血製剤、成分製剤および血漿分画製剤が適正に使用されるために必要な情報を収集・提供するため、各血液センターに医薬情報担当者を配置しました。当センターでは、平成3年10月に供給課医薬情報係を設置した後、平成19年4月に供給課学術担当に名称変更、平成22年4月に組織改編により、学術・品質情報課学術係となりました。平成31年4月に組織改編により学術情報・供給課学術係として活動しています。学術担当の具体的業務は、以下のとおりです。

（１）医薬情報の提供・収集活動

各医療機関へ訪問し、輸血療法の実施に関する指針、血液製剤の使用指針、血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン、輸血用血液製剤取り扱いマニュアル、血液製剤一覧表、血液製剤投与早見表、血液製剤に関する最新情報（輸血情報、お知らせ文）を提供し、同時に血液製剤使用状況に関する各医療機関の情報収集を実施しています。

（２）副作用処理

血液製剤投与による副作用発生時の対応として、患者血液と使用した血液を副作用の症例ごとに調査を行い、今後患者が副作用の少ない安全な輸血を受けられるための重要な業務として取り組んでいます。

（３）遡及調査

複数回献血者感染症検査陽転情報や輸血後情報（献血後または納品後に献血者、検査データ、医療機関等から得られる輸血用血液製剤についての安全性に関する情報）に基づき、遡及調査対象製剤（以下「対象製剤」）を供給された医療機関へ訪問し、対象製剤の使用状況等を調査し、同時に対象製剤に関する情報提供を実施しています。

（４）苦情処理

血液製剤及び供給等に対する苦情には、その原因究明・再発防止に迅速に対処することにより医療機関との良好な信頼関係の保持に努めています。

（５）学術情報活動

①医療機関等での説明会

- ・血液製剤の取り扱いに関すること
- ・血液製剤に関する品質・有効性・安全性に関すること
- ・輸血検査に関すること
- ・血液事業に関する業務内容や新しい動きに関すること
- ・研修会・輸血懇話会の案内に関すること
- ・その他医薬情報に関すること等を実施しています。

②輸血研修会の開催

輸血及び血液事業に関する調査研究並びに輸血に関する新しい知識、技術の普及発展に寄与する目的で年1回程度開催されています。

9 医療機関への技術協力

県内における輸血医療は医療機関と血液センターが相互に連携を密にして円滑に推進する必要があります。この一環として血液製剤を供給するばかりでなく血液センターの高度な技術を生かした自己血輸血、末梢血幹細胞移植等の技術協力を行っていましたが、末梢血幹細胞移植に係る技術協力は平成25年度で終了しました。

(1) 自己血輸血への技術協力

自己血とは、あらかじめ患者本人の血液を貯血しておき、手術などで必要なときにその血液を使用する目的で採血されたものです。

自己血輸血は肝炎（HBV、HCV）、免疫不全症候群（HIV）、成人T細胞性白血病（HTLV-1）などの原因となるウィルスの輸血後感染や同種免疫、免疫抑制作用及び移植片対宿主病（GVHD）などの輸血のリスクを防ぐ安全な輸血の方法です。

医療機関での自己血輸血療法の推進のため、当血液センターは医療機関で実施できない技術（自己血の分離調製や保管管理）を提供することとしました。

平成5年7月から医療機関と自己血受託契約を締結し、自己血の分離調製及び保管に係る技術協力を開始し、医療機関からの依頼数は年々増加しました。

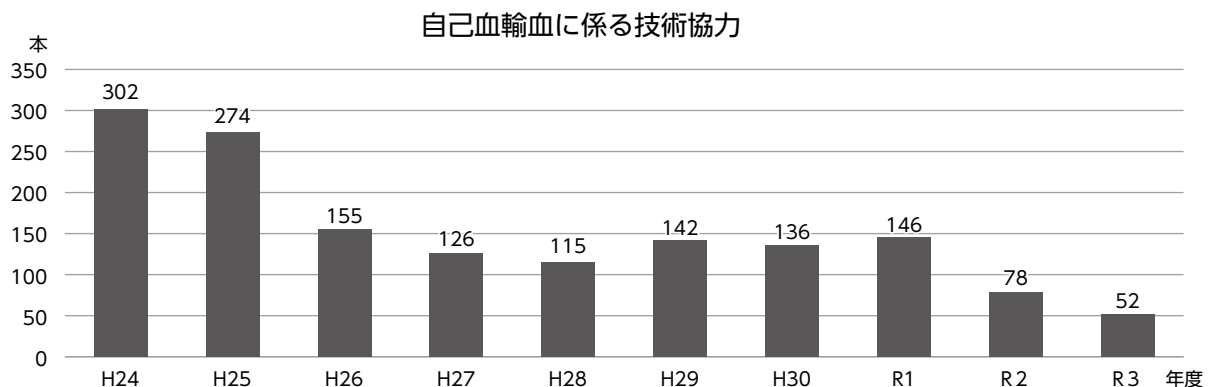
しかし、平成13年頃から依頼数は減少し平成18年頃までその傾向は続きました。これは、自己血実施医療機関内で自己血に係る機器整備や技術習得による分離調製及び保管管理が可能になったことによります。医療機関での技術習得のため、血液センターでは技術研修等を実施しました。

平成19年頃からは、新規自己血受託契約数の増加により依頼数が再び増え始めました。

その後、自己血の分離調製が必要ない長期保存（採血後35日間）の自己血用採血バッグが開発され、血液センターから医療機関へ院内での自己血保管を推奨したことにより、遠心機等の設備がない医療機関でも院内で自己血の採血及び保管が出来るようになりました。

平成23年頃から院内で採血した自己血を保管し、自己血輸血を実施する医療機関が増え、自己血に係る技術協力の依頼数は減少しています。

平成24年度に自己血の技術協力依頼があった医療機関数は17施設でしたが、令和3年度は3施設となっています。



(2) 輸血関連検査への技術協力

輸血前に行われる血液型や不規則抗体検査等で、疾患や薬剤の影響などにより輸血実施医療機関で血液型や不規則抗体が確定できない場合や、末梢血幹細胞移植や血小板不応状態で行うHLA検査の実施依頼に対し、患者検体を回収して検査を行っています。当血液センターでは平成11年3月まで検査をしていましたが、同年4月検査部門集約により福岡県赤十字血液センターで行われるようになり、平成20年から九州管内の血液センターの検査及び製造部門を集約した九州ブロック血液センター（福岡県久留米市）で実施しています。

(3) 末梢血幹細胞移植への技術協力

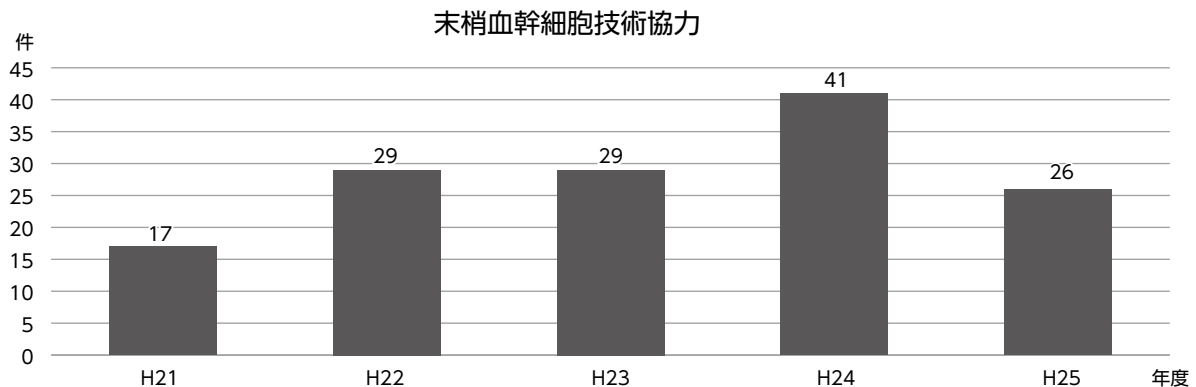
末梢血幹細胞を採取・凍結保存し、癌根絶のための超大量化学療法施行後に再輸注し、すみやかな造血能力の回復を図る治療法です。従来の骨髄移植や自家骨髄移植と比べ移植後の造血回復が早くなる効果があります。また全身麻酔が不要で、治療成績は同等以上とも言われています。しかも、採取の方法も成分採血と同様に容易に行うことができます。

このため、急性白血病や悪性リンパ腫以外にも多発性骨髄腫や慢性骨髄性白血病等の造血器腫瘍や乳癌、神経芽腫、卵巣癌、睾丸腫瘍などの固形癌を対象とし、平成6年4月に保険診療が認められたことにより積極的に行われるようになりました。

当血液センターでは平成4年4月から技術協力を開始し、当時は患者の主治医同席の上当血液センター内で末梢血幹細胞の採取を実施していましたが、平成8年1月に佐賀県から「がん死半減対策」の一環として末梢血幹細胞採取装置、CO2インキュベータ、フローサイトメトリーの機器貸与を受け、医療機関に出向いて末梢血幹細胞採取を行い、採取した血液を当血液センターで分離調製、精度検査及び凍結保存などの技術協力を行っていました。平成13年4月より当血液センター製剤部門集約により、分離調製及び精度検査は福岡県赤十字血液センター、凍結保存を当血液センターで実施しました。

その後、各医療機関で末梢血幹細胞採取装置を購入されたことで、医療機関に出向いて末梢血幹細胞採取することは少なくなりました。分離調製及び精度検査は集約前と変わらないよう取り組んでいましたが、医療機関において分離調製等が出来るよう技術研修などを行い、平成25年度末で末梢血幹細胞移植に係る技術協力は終了しました。

末梢血幹細胞移植に係る技術協力は、平成6年4月から開始して平成25年3月終了までの20年間で1047件となりました。



(4) 佐賀県合同輸血療法委員会

佐賀県合同輸血療法委員会の目的は、県内の輸血療法委員会を設置する医療機関相互の情報交換及び研修等を実施することにより、適正かつ安全な輸血療法の向上を目指す。

同委員会は世話人、血液センター学術情報・供給課学術係が事務局となっています。

世話人の構成

一般社団法人佐賀県医師会、一般社団法人佐賀県歯科医師会、一般社団法人佐賀県病院薬剤師会、公益社団法人佐賀県看護協会、一般社団法人佐賀県臨床検査技師会、佐賀大学医学部附属病院、地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館、唐津赤十字病院、独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター、社会福祉法人恩賜財団済生会唐津病院、特定医療法人静便堂白石共立病院、医療法人社団如水会今村病院、佐賀市立富士大和温泉病院、独立行政法人地域医療機能推進機構佐賀中部病院、伊万里有田共立病院、独立行政法人国立病院機構佐賀病院、佐賀県健康福祉本部、佐賀県赤十字血液センター

委員会活動の記録

●第3回佐賀県合同輸血療法委員会

平成25年1月19日（土）14：30～17：30 アバンセホール 参加者82人

挨拶 佐賀県健康福祉本部 医療統括官 古川次男

佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 佐川公矯

議題

座長 佐賀大学医学部附属病院 検査部長 診療教授 末岡榮三朗

1. 2012年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計結果報告

佐賀県赤十字血液センター 学術・品質情報課 東島悦子

2. 当院の輸血業務の実施状況

社会福祉法人 恩賜財団

済生会唐津病院 検査技師長 百田浩志

講演

座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 佐川公矯

『医療施設内 輸血療法委員会及び都道府県 合同輸血療法委員会の効用について』

講師 厚生労働省 医薬食品局 血液対策課 課長補佐 笠松淳也 先生

座長 佐賀県医師会 常任理事 樽木等

『アルブミンの国内自給がなぜ必要なのか』

講師 大阪医科大学附属病院 輸血室 室長 河野武弘 先生

●第4回佐賀県合同輸血療法委員会

平成25年12月7日（土）14：30～17：30 アバンセホール 参加者79人

挨拶 佐賀県健康福祉本部 医療統括官 古川次男

佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 佐川公矯

議題

座長 地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館 輸血部長 松石英城

1. 2013年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告

佐賀県赤十字血液センター 学術・品質情報課 東島悦子

2. 当院における輸血業務の実施状況

特定医療法人 静便堂 白石共立病院 中央検査部 小野吹美

座長 佐賀大学医学部 臨床検査医学講座 教授 末岡榮三朗

3. 医療機関からの質問に答えて（Q&A）

講演1

座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 佐川公矯

『患者中心の輸血医療（PBM：Patient Blood Management）』

講師 旭川医科大学病院 臨床検査・輸血部 部長 准教授 紀野修一 先生

講演2

座長 特定医療法人静便堂白石共立病院 外科医長 理事 岸川圭嗣

『大量出血におけるクリオプレシピテートおよびフィブリノゲン製剤の投与効果について』

講師 名古屋大学医学部附属病院 輸血部 山本晃士 先生

●第5回 佐賀県合同輸血療法委員会

平成26年11月29日（土）14：30～17：30 佐賀県庁 新行政棟11階 大会議室 参加人数93人

挨拶 佐賀県健康福祉本部 医療統括監 古川次男

佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題

座長 佐賀県赤十字血液センター 所長 入田和男

1. 2014年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告

- 佐賀県赤十字血液センター 学術・品質情報課 東島悦子
2. 当院における輸血管理について
JCHO佐賀中部病院 臨床検査科診療部 宮地律子
3. 自己血外来の活動報告
地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館 看護部 石田福美
座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
4. 輸血療法に係るQ&A
5. 輸血療法委員会設置推進用パッケージの説明

講演 1

- 座長 地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館 輸血部長 松石英城
『学会認定・臨床輸血看護師の活動の現状と課題』
講師 医療法人社団 神鋼会 神鋼病院 看護部 松本真弓 先生

講演 2

- 座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
『血液内科医から見た今までの輸血、そしてこれからの輸血』
講師 藤田保健衛生大学 血液内科・化学療法科 准教授 水田秀一 先生

●第6回 佐賀県合同輸血療法委員会

平成27年12月19日（土） 14：30～17：30 佐賀県庁 新行政棟11階 大会議室 参加人数109人
挨拶 佐賀県健康福祉本部 医療統括監 古川次男
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題

- 座長 嬉野医療センター 医長 古舘晃
2015年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告
事務局（佐賀県赤十字血液センター） 東島悦子

講演 1

- 座長 伊万里有田共立病院 副院長 水田敏彦
『輸血感染症について』
講師 日本赤十字社九州ブロック血液センター 品質部長 迫田岩根 先生

講演 2

- 座長 福岡大学病院 輸血部 部長 熊川みどり
『「在宅輸血ガイドライン素案（手引書）」作成までの経緯』
講師 山形県赤十字血液センター 学術・品質情報課 学術係長 黒田優 先生

講演 3

- 座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
『在宅輸血のニーズと課題～在宅医療の現場では』
講師 医療法人 ひらまつ病院 ひらまつ在宅療養支援診療所 院長 鐘ヶ江寿美子 先生

総合討論

- コメンテーター 日本赤十字社東北ブロック血液センター 所長 清水博 先生

●第7回 佐賀県合同輸血療法委員会

平成28年11月26日（土） 14：30～17：30 佐賀県庁 新行政棟11階 大会議室 参加人数87人
挨拶 佐賀県健康福祉部 医療統括監 古川次男
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題 1

- 座長 富士大和温泉病院 院長 佐野雅之
2016年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告
事務局（佐賀県赤十字血液センター） 東島悦子

議題 2

座長 富士大和温泉病院 院長 佐野雅之
『輸血療法委員会の立ち上げについて』
講師 伊万里有田共立病院 副院長 水田敏彦

議題 3

『輸血検査DVDの紹介』
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

講演 1

座長 長崎大学病院 細胞治療部 副部長 長井一浩
『熊本地震～熊本県赤十字血液センターの対応～』
講師 熊本県赤十字血液センター 所長 井清司 先生

講演 2

座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
『産科危機的出血への対応』
講師 佐賀県医療センター好生館 産婦人科 部長 室雅巳 先生

●第8回 佐賀県合同輸血療法委員会

平成29年11月25日（土） 14：30～17：30 佐賀県庁 新館11階 大会議室 参加人数74人
挨拶 佐賀県健康福祉部 医療統括監 野田広
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題 1

座長 独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター 内科医長 有尾啓介
2017年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告
事務局（佐賀県赤十字血液センター） 東島悦子

議題 2

座長 独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター 内科医長 有尾啓介
『輸血療法委員会の活動状況について』
講師 医療法人社団如水会今村病院 診療技術部検査科 淀川佳江 先生

議題 3

『九州各県合同輸血療法委員会関係者会の活動報告』
佐賀県合同輸血療法委員会 事務局 東島悦子

講演 1

座長 唐津赤十字病院 副院長 宮原正晴
『科学的根拠に基づいた赤血球製剤の使用ガイドライン』
講師 熊本大学医学部附属病院 輸血・細胞治療部 副部長 米村雄士 先生

講演 2

座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
『小規模医療機関の輸血の課題と学会策定ガイドの目指す方向』
講師 青森県立中央病院 臨床検査部 部長 北澤淳一 先生

●第9回 佐賀県合同輸血療法委員会

平成30年11月10日（土） 14：30～17：40 佐賀県庁 新館11階 大会議室 参加人数77人
挨拶 佐賀県健康福祉部 医療統括監 野田広
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題 1

座長 地域医療機能推進機構佐賀中部病院 副院長 河島通博
2018年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告
佐賀県合同輸血療法委員会事務局 井川福康

議題 2

座長 地域医療機能推進機構佐賀中部病院 副院長 河島通博
『輸血についての取り組み～当院での学会認定看護師の活動～』
『当院の輸血業務について』

講師 唐津赤十字病院 学会認定看護師 山下真由美 先生
唐津赤十字病院 学会認定看護師 熊本智加 先生
唐津赤十字病院 検査技師 井手理恵 先生
唐津赤十字病院 検査技師 鶴田志穂 先生

議題 3

『佐賀大学医学部附属病院における査定の状況』
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

お知らせ 世界HTLV-1 DAYについて

講演 1

座長 佐賀大学医学部附属病院 検査部副技師長 山田尚友
『安全な輸血療法を行うための検査室の対策・対応』
講師 東邦大学医療センター大森病院 輸血部 技師長 奥田誠 先生

講演 2

座長 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗
『大量出血に対する輸血療法』
講師 大分大学医学部附属病院 輸血部 診療准教授 緒方正男 先生

●第10回 佐賀県合同輸血療法委員会

令和元年11月2日(土) 14:30~17:30 佐賀大学医学部 臨床大講堂 参加人数65人

挨拶 佐賀県健康福祉部 医療統括監 野田広
佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

議題 1

座長 国立病院機構佐賀病院 統括診療部長 野見山亮
2019年度 佐賀県内の輸血療法の適正化促進に関するアンケート集計報告
佐賀県合同輸血療法委員会事務局 井川福康

議題 2

座長 国立病院機構佐賀病院 統括診療部長 野見山亮
『当院における輸血療法の現状と課題』
講師 佐賀市立富士大和温泉病院 院長 佐野雅之 先生

議題 3

『血液センターからの情報提供』
佐賀県赤十字血液センター 所長 松山博之

講演 1

座長 地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館 輸血部長 飯野忠史
『I&A受審のすゝめ』
講師 長崎大学病院 細胞治療部 副部長 長井一浩 先生

講演 2

座長 医療法人社団如水会今村病院 副院長 岸川圭嗣
『在宅輸血の現状と課題』
講師 赤坂クリニック 院長 赤坂浩司 先生

●第11回 佐賀県合同輸血療法委員会

令和3年1月9日(土)

※県内の大雪等の影響により無期延期となりましたが、期間限定で佐賀県広報広聴課が開設している公

式YouTubeチャンネルにて特別講演を配信しました。

配信期間：令和3年3月26日（金）～同年4月30日（金）

配信媒体：YouTube（佐賀県広報広聴課開設チャンネル）

視聴回数：192回

講演 1

座長 唐津赤十字病院 第3内科部長 富樹りか

『宮崎県における合同輸血療法委員会の活動状況と問題点』

講師 宮崎大学医学部附属病院 輸血・細胞治療部 部長 久富木庸子 先生

講演 2

座長 佐賀県赤十字血液センター 所長 松山博之

『血液疾患に対する造血細胞移植療法と細胞療法の進歩』

講師 佐賀大学医学部附属病院 血液・呼吸器・腫瘍内科 准教授 安藤寿彦 先生

●第12回 佐賀県合同輸血療法委員会

令和4年1月29日（土） 14：30～17：30 WEB開催（Microsoft Teams使用）

挨拶 佐賀県合同輸血療法委員会 代表世話人 末岡榮三朗

佐賀県健康福祉部 医療統括監 野田広

議題 1

座長 佐賀大学医学部附属病院 臨床検査技師 山田尚友

コロナ禍における血液製剤の使用状況に係るアンケート結果報告

佐賀県赤十字血液センター 学術情報・供給課長 一ノ瀬知早子

議題 2

座長 佐賀大学医学部附属病院 臨床検査技師 山田尚友

『当院の輸血療法に関する活動について』

講師 独立行政法人国立病院機構 佐賀病院 研究検査科 横井伸子 先生

議題 3

座長 佐賀大学医学部附属病院 臨床検査技師 山田尚友

『コロナ禍における血液確保対策について』

講師 日本赤十字社九州ブロック血液センター 事業部長 千葉泰之 先生

講演 1

座長 佐賀県赤十字血液センター 所長 松山博之

『鹿児島県における新型コロナ禍における輸血医療に対する取り組み』

講師 鹿児島大学病院 輸血・細胞治療部 部長 古川良尚 先生

講演 2

座長 唐津赤十字病院 第3内科部長 富樹りか

『不規則抗体の臨床：最新の知見』

講師 公立大学法人福島県立医科大学 総括副学長 大戸斉 先生



合同輸血療法委員会の
開催の様子
(2019年度)



合同輸血療法委員会の開催の様子（2013年度）

10 骨髄ドナーの受付

白血病、再生不良性貧血、先天性免疫不全症などの血液の難病患者を救うため骨髄移植が行われていますが、それには、白血球の型（HLA型）を適合させる必要があります。

しかし、このHLA型が一致する確率は、兄弟姉妹間で4人に1人、他人では数百から数万人に1人と非常にまれなため、広く一般からドナーを募る骨髄バンクが必要となりました。

骨髄バンク事業は、国（厚生労働省）の主導のもと、公益財団法人日本骨髄バンクが主体となり、日本赤十字社や地方自治体により行っている公共事業です。

血液センターでは、「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」（平成24年法律第90号）に基づく造血幹細胞提供支援機関として、ドナー登録希望者の受付並びにHLA検査とその一元管理を行うほか、献血会場で日本骨髄バンクと協力し、集団登録受付説明会を実施しています。

骨髄バンク登録総人数

（単位：人）

年度	佐賀県登録者総数	全国登録者総数
H24	4,281	429,677
H25	4,464	444,143
H26	4,523	450,597
H27	4,635	458,352
H28	4,726	470,270
H29	4,802	483,879
H30	4,921	509,263
R 1	4,982	529,965
R 2	5,163	530,953
R 3	5,387	537,820

II その他の取り組み

（１）日本輸血・細胞治療学会認定 アフェレーシスナースの育成

平成23年、医療の現場における末梢血幹細胞治療の増加に伴い、アフェレーシスに精通し、安全なアフェレーシスに寄与することができる看護師の育成を目的として日本輸血・細胞治療学会認定のアフェレーシスナース制度が始まりました。

これを受けて、九州ブロック管内の血液センター看護師の人材育成とスキルアップを目的にアフェレーシスナース取得支援が開始されました。

佐賀センターでは現在学会認定アフェレーシスナースが7名在籍、取得者を中心とした九州ブロックアフェレーシス会議「ONE九州」に出席し成分採血業務の効率化と安全性の向上に取り組んでいます。

（２）分割血小板採血の開始

平成26年9月より血小板製剤20単位分から10単位製剤2本への分割製造が可能となり、九州ブロック血液センター管内でも、平成26年11月4日から分割血小板の製造が開始されました。分割血小板採血の対応機種である成分採血装置トリマアクセルは当初1台でしたが、令和元年度までに5台整備されました。

また、平成31年から成分採血装置CCSでも分割血小板の採血が可能となり、令和3年度における佐賀センターの分割血小板採血の割合は65.6%を占めるまでになっています。

高血小板保有者から採血することで一度の採血で2人の患者様へ届けることができます。

（３）原料血漿確保に向けて（40本／日）

近年、血漿分画製剤（免疫グロブリン製剤）の供給量増加に伴い原料血漿の需要が増えています。成分採血は一日40人を目標として採血しており、令和3年度は原料血漿の目標量を確保することができました。

（４）採血副作用対策の強化（水分摂取について）

成人の体重の1/13を占める血液は人体の機能を維持するために欠かせないものです。血液は血球（赤血球、白血球、血小板）と血漿（水分91%、タンパク質9%）で構成され、成分献血はその中の一部を分離し採取する方法です。

年々、気温の上昇により熱中症になりやすい環境の中、採血中に水分補給をお願いしています。血液の早期回復に繋がれること、また採取量が増える採血の終盤は、採血副作用（血管迷走神経反射）予防にも効果があるとされています。

（５）全血採血時における検査方法の変更（指先穿刺の導入）

静脈穿刺における採血副作用（痛み、痺れ、神経損傷）を防止する目的で、令和2年3月より移動採血における全血採血の事前検査として導入されました。

令和4年1月からは固定施設における全血採血事前検査へも適用が拡大されています。指先穿刺は世界的にも導入されている検査方法でもあり、静脈穿刺による精神的負担を軽減する目的もあります。

（６）献血者の保護対策

○「献血の同意説明書」の導入

平成25年1月から献血者に対するインフォームドコンセントをさらに進めるために、献血受付時に献血の副作用やいただいた血液の利用目的などについて同意をいただくようになりました。

○献血会場における身体障害者補助犬の受入れ開始

平成31年4月より障害のある方も障害がない方と等しく安心して献血にご協力いただくために身体障害者補助犬法に則り、身体障害者補助犬の受入れを実施しています。

補助犬は、身体障害者補助犬法に基づき認定された盲導犬、介助犬、聴導犬です。

II

血液事業学会
発表事例



40th Anniversary

新鮮凍結血漿の大量破損事故により供給完了までに 長時間を要した事例の検証

第37回日本血液事業学会総会（平成25年：札幌）

【佐賀県赤十字血液センター】

田中祐一、馬渡幸秀、北川弘幸、阿志賀久美子、一ノ瀬知早子、大坪正道、山下明孝、吉村博之、佐川公矯

Verification on a case of long-delayed supply of fresh frozen plasma by
accidental breakage of large amount of fresh frozen plasma

Saga Blood Center, Japanese Red Cross Society Yuichi Tanaka, Yukihide Mawatari, Hiroyuki Kitagawa,
Kumiko Ashiga, Chisako Ichinose, Masamichi Otsubo, Yoshitaka Yamashita, Hiroyuki Yoshimura, Kimitaka Sagawa

【抄録】

佐賀県内の中核医療機関からFFPの大量破損の苦情が発生したので、その検証結果を報告する。

成分採血由来のFFP-LR-Ap 2本の供給依頼に対して、供給毎に破損が次々と判明し、供給完了まで4回の供給を行った。供給完了までに、時間にして7時間30分要した。

破損は輸送容器に強い衝撃が同方向に加えられたために生じたと考えられる。そして、その衝撃は、①九州ブロック血液センターによる梱包時、②九州ブロック血液センターから佐賀県赤十字血液センターへの輸送行程時、③佐賀県赤十字血液センターにおける受入保管時の3つの工程のいずれかに生じたと考えられた。しかし、衝撃を与えた工程の特定はできなかった。

佐賀県赤十字血液センター及び九州ブロック血液センターにおいて、おのおの保管方法、輸送時の梱包方法を変更したところ、破損を減らすことができた。ただし、一番重要なことは、破損した可能性がある事態が発生した場合は、直ちに上司に報告することである。

Key words: fresh frozen plasma, breakage, storage

【はじめに】

新鮮凍結血漿（以下、FFPと略す）における医療機関からの苦情は容器破損が大半である。佐賀県赤十字血液センターにおいても、FFPによる苦情は容器破損が大半を占めるが、本数は年間5本前後である。しかし今回、佐賀県内の中核医療機関であるK病院からFFPの大量破損の苦情が発生したので、その検証結果を報告する。

【経緯】

2013年1月、K病院からの成分採血由来のFFP-LR-Ap 2本の供給依頼に対して供給を行ったが、供給毎に破損が次々と判明し、供給完了まで4回の供給を行った。時間にして7時間30分を要し、医療機関へ多大な迷惑および診療の滞りを与えた。破損した本数は合計9本となり、破損箇所は9本全てバッグの側部であった。（図1）

【結果】

当該製品の調整から医療機関への供給までの破損原因を調査した。

まず、当該の9本の破損した製品は、全て同日に九州ブロック血液センターから佐賀県赤十字血液センターに受入されたものであり、また、同じ輸送容器に梱包された10本のうちの9本であった。したがって、破損はこの輸送容器にいずれかの時点で強い衝撃が加えられたために生じたものと考えられる。しかも、破損した9本のうち8本は同じ方向のサイドスリットが破損しており、残り1本は反対側のスリットが破損していた。ただし、この1本は、同じ輸送容器の最上部に裏返して重ねられていたものであり、衝撃は同じ方向に与えられたものと推察された。

そして、その衝撃は、①九州ブロック血液センターによる梱包時、②九州ブロック血液センターから佐賀県赤十字血液センターへの輸送行程時、③佐賀県赤十字血液センターにおける受入保管時の3つの工程のいずれかに生じたと考えられた。

まず、①九州ブロック血液センターによる梱包時の破損の可能性について調査したところ、衝撃を与えた事実は確認できなかった。次に、②九州ブロック血液センターから佐賀県赤十字血液センターへの輸送行程時については、運送会社の輸送中の衝撃値を示すグラフを確認したが、大きな衝撃は記録されていなかった。さらに、③佐賀県赤十字血液センターにおける受入保管時についても調査したが、衝撃を加えた明確な事実は確認できなかった。以上のように、破損事故の原因および工程の特定は究明できなかった。

【考察】

今後、破損を減らすための対応として、佐賀県赤十字血液センターにおいては、①製品受入時の取り扱いを、慎重かつ丁寧に行う。②保管時において、縦置きを廃止して全て平置きとした（図2）。③製品受入、保管時、供給時、全てにおいて製品に衝撃を与えた時は、営業所管理者の判断で九州ブロック血液センター品質管理課へ返送し、外観検査を依頼する。以上のことを取り決めた。

佐賀県赤十字血液センターにおけるFFPの保管は、従来、縦置きであった。この保管方法では、接地している部分への負荷が大きいため、受入保管時、または、製品を取り出す際に破損する可能性があった。しかし今回、冷凍庫内での保管方法を平置きに変更したことにより、接地面への負荷が軽減され破損する可能性を減らすことができた。佐賀県赤十字血液センターにおけるFFP-LR-Apの破損本数の推移は図3に示す。

九州ブロック血液センターにおいても同時期に、FFPの梱包方法を変更している。従来の梱包では、輸送容器内に製品を5本ずつ

2列に平積みし、周囲の隙間を緩衝材で埋める方法がとられていた。それを、平積みにした製品の一段ごとに緩衝材を敷いた梱包方法に変更することで、製品への振動、衝撃が低減されたとの報告がある。九州管内のFFP-LR-Apの破損本数の推移は図4のとおりである。

FFPのバッグは、低温ではガラス化しているため、輸送時の衝撃などにより破損する場合がある¹⁾。したがって、医療機関での納品時に外観チェックを協力してもらうことは有効な手立てである。また、移管などの輸送を極力控えることで、破損する可能性を減らすことができる。そのためには、在庫管理を厳密に行い、管理する必要がある。そして、より安全な梱包方法、輸送方法、バッグの素材変更²⁾などを全国統一で早急に取り組むべきである。

ただし、一番重要なことは、破損した可能性がある事態が発生した場合は、直ちに上司に報告することである。報告を怠ることによって、医療機関に多大な迷惑がかかるうえ、もし、緊急手術などが行われていた場合は、患者の命に関わることになる。このような事態を起こさないようにするためにも、些細なことでも報告することが肝要である。また、献血者の善意を活かすためにも、FFPの破損対策は喫緊の課題である。

【謝辞】

図4に使用したデータを提供して頂いた九州ブロック血液センター営業所管理者 荒添悟氏に謝意を表します。

【文献】

- 1) 高柳美行ほか：凍結保存血液バッグの衝撃強度
日赤薬剤師会雑誌，62：103-105， 1994
- 2) 栗原勝彦ほか：新鮮凍結血漿-LR「日赤」バッグの破損対策について，
血液事業，36（3）：699-703， 2013

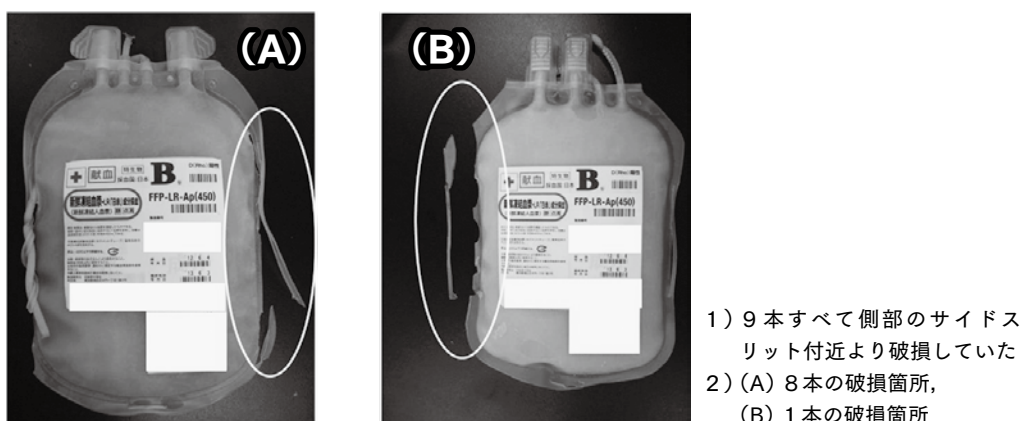


図1 破損したバッグの写真

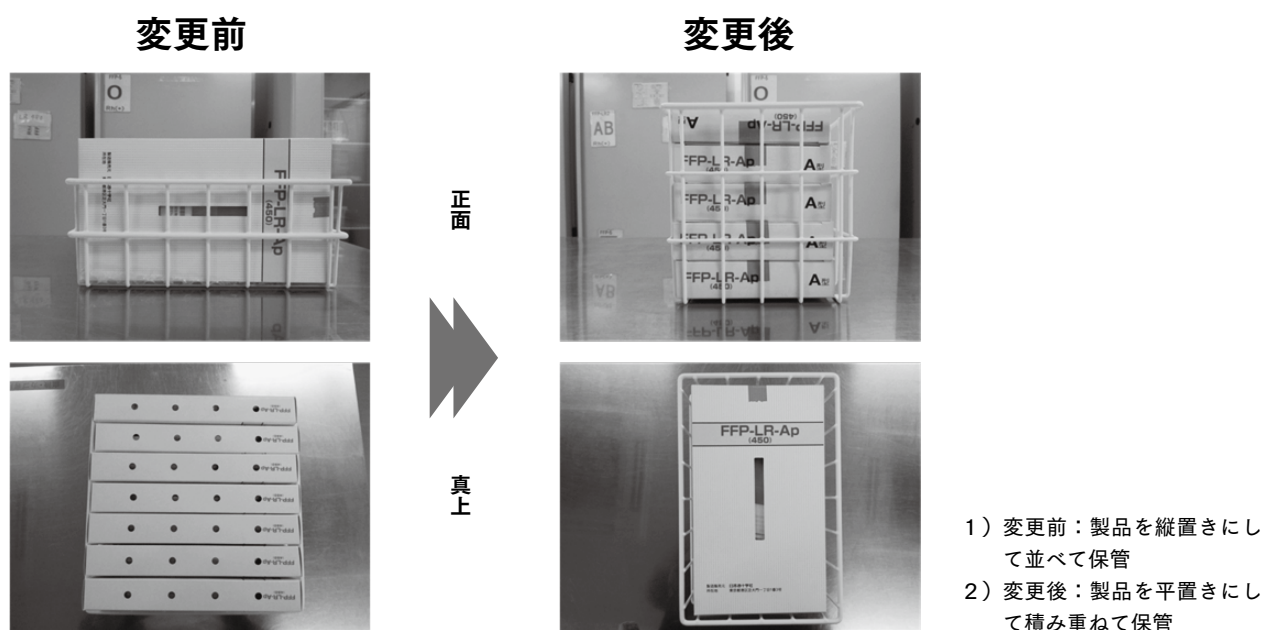


図2 佐賀県赤十字血液センター内における保管方法の変更

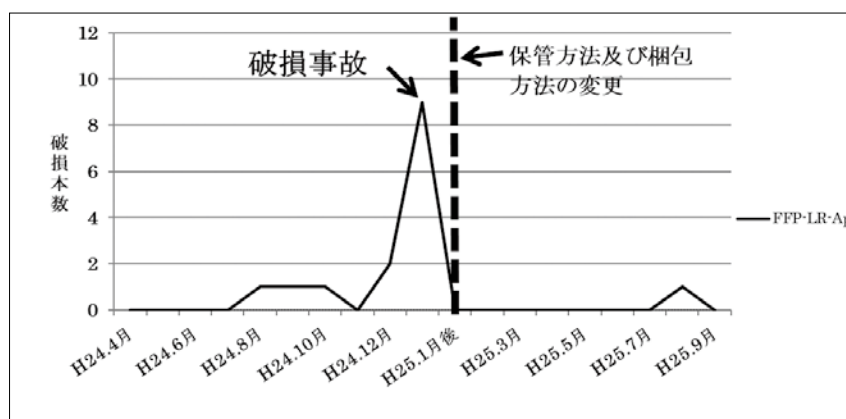


図3 佐賀県赤十字血液センターにおけるFFP-LR-Apの破損本数の推移

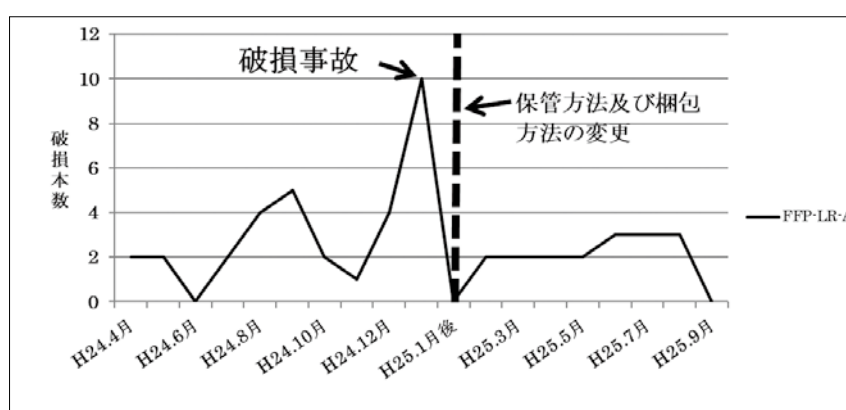


図4 九州管内におけるFFP-LR-Apの破損本数の推移
(このデータは九州ブロック血液センター需給管理課より提供された)

小規模血液センターでの検診医の確保対策と支援体制について

第37回日本血液事業学会総会（平成25年：札幌）

【佐賀県赤十字血液センター】

山本恵子、袖崎賢一郎、江口嘉則、吉村博之、佐川公矯

【はじめに】

検診医は安定的に確保することが難しく、非常勤医師への依存度も高いのが現状である。検診SOPや安全対策等の教育訓練の実施にも工夫が必要である。検診医の確保と支援体制について小規模血液センターでの取り組みを報告する。

【方法】

1 検診医師の確保対策

- (1) 育児休暇中の女性医師を活用した。勤務時間に制限のある医師には、所長の協力を得て常勤医師によるカバー体制を整えた。
- (2) 自センターでの調整が困難な場合に、福岡センターへ医師の紹介依頼を行う体制を整えた。
- (3) 体調不良などで急遽代わりの医師が必要な場合の、緊急の検診医師確保のための連絡体制を準備した。

2 支援体制

- (1) 常勤医師の内勤日に各非常勤医師の勤務を組合せ、情報交換や教育訓練の機会を設けた。高齢医師の場合は、検診医師を短時間交代し、休憩時間を長めに取る工夫をした。

- (2) 問診表の記入や検診SOPでの調べものを行い、問診時に医師をサポートする専属のクラークを配置した。
- (3) 最低45分間の休憩がとれるよう受付時間を調整し、昼休みの確保に努めた。

【結果】

現在は、固定した医師への依頼によって医師不足は解消した。検診業務に精通した医師は、献血者からの評判も良好で、職員からの信頼も厚い。また、検診医同志は孤立しがちな環境で仕事をしていたが、常勤医師から非常勤医師への働きかけは、検診での疑問点や苦労を共有したり、安全対策等の医学的側面を説明する上で有効であった。問診補助者や休憩時間の確保は、医師の負担を軽減し、より良い職場環境の提供につながった。効果的な医師のリクルートについては、今後も検討を重ねる必要があると感じている。医師への支援については、他課職員の協力を得ながら継続したい。

県境を越えた供給体制の導入

第39回日本血液事業学会総会（平成27年：大阪）

【佐賀県赤十字血液センター】

清水翔太郎、田中祐一、山下明孝、森優太、稲富鈴子、阿志賀久美子、一ノ瀬知早子、大坪正道、吉村博之、入田和男

【はじめに】

安定供給、広域需給管理体制の確立の一環として、医療機関への供給時間60分以内を遂行するために都道府県単位となっている供給エリア見直し、福岡県赤十字血液センターと供給エリアの変更を平成26年5月1日より実施した。福岡県南西部、大川市・柳川市を佐賀センターより供給し、佐賀県東部、鳥栖市・基山町を福岡センターからの供給とエリア変更を実施した。新体制の導入検討、実施方法と供給の現状を報告する。

【方法】

1. 供給体制・供給量、供給時間の比較検討
2. エリア変更を円滑に進めるための方策
3. エリア変更の実施に際して
4. 導入後のアンケート調査

【結果】

エリア変更については、両県の業務課、医師会との円滑な調整により障害なく遂行することができた。供給量については平成26年5月からの1年間の比較で7,626単位、110.6%の供給増となった。また、供給時間については、大川市柳川地区は、50分以内で供給が可能になり20分～40分の時間短縮となった。鳥栖市基山町地区は、30分以内で供給が可能になり20分～50分の時間短縮となった。緊急走行についても大川市柳川地区で11.1%の減、鳥栖市基山町地区では、44.1%の減となった。

【考察】

県境を越えたエリア変更により医療機関への供給時間の短縮、安定供給については向上を図ることができた。緊急走行等を含む重篤な患者への輸血までの対応が早くなり医療機関にとってメリットとなった。血液センターにおいても供給までの時間、またセンターまでの戻りの時間を考慮すると医療機関だけでなく血液センターにも時間のメリットとなることが証明された。また、これからも受注・供給体制をさらに充実させ医療機関のニーズに合い、かつ供給効率が高くなるように医療機関との連携を推進していきたい。

佐賀大学附属病院後期臨床研修医による検診業務支援体制の確立について

第39回日本血液事業学会総会（平成27年：大阪）

【佐賀県赤十字血液センター】

山本恵子、松本光子、増田善久、江口嘉則、溝上博之、吉村博之、入田和男

【はじめに】

当センターでは検診医の慢性的な不足状態が恒常化しており、安定的な医師確保は喫緊の課題であった。この度、佐賀大学付属病

院の協力により後期臨床研修医を定期的に派遣して頂く体制が確立できたので、その概要を報告する。

【方法】

平成26年6月当センター所長並びに事務部長が佐賀大学病院長はじめ大学病院の幹部と面談した。検診医師の現状を説明し、検診業務支援を依頼した。当初は医師の多忙や手当の問題があり、難色を示された。しかし、県内最大の血液製剤使用医療機関として社会貢献すべきとの病院長の英断により、後期臨床研修医の派遣が実現した。派遣体制の構築にあたり、当センター、大学、双方の総務課が窓口となり以下について詳細を打ち合わせた。

- (1) 各部門（血液センター、大学総務課、医局、派遣医師）の役割分担
- (2) 派遣計画の策定方法
- (3) 医師の出勤日の確認方法
- (4) 医師の教育訓練の実施方法
- (5) 検診当日の詳細

【結果】

平成26年11月より毎週1名、医師派遣の協力が得られた。各部門の連携により、医師の欠勤等の問題も発生せず、検診医師の不足解消につながった。教育訓練は、医師の大半が初期臨床研修で血液センターでの研修を受講済みのため、事前に検診業務の簡単な資料を送付し、当日のオリエンテーションで補完する形式をとった。

【考察】

医師に献血の現場を経験してもらうことは、血液製剤が献血者の善意による有限かつ貴重な公共資源であることを実感し、血液製剤を使用する側として、輸血用血液の適正使用の動機づけにつながると考えられる。大学からの定期的な医師の派遣は、医師の継続的な確保につながると同時に、大学病院と多面的な信頼関係を構築する上でも有意義と考える。今後は、事務手続きの簡素化や医師への効果的な教育訓練の方法等を検討し、血液事業への理解を深める機会として有効に活用出来るよう取組みたい。

佐賀県赤十字血液センターにおけるGMP推進委員会の活動について 第40回日本血液事業学会総会（平成28年：名古屋）

【佐賀県赤十字血液センター】

百武雅子、大坪正道、佐々木美穂、眞砂裕延、上田砂智美、田中祐一、阿志賀久美子、中島布貴子、大町幸子、小島律子、稲富鈴子、東島悦子、吉村博之、松山博之

【はじめに】

佐賀県赤十字血液センターでは平成13年度に全国で最初に製造部門を集約したセンターである。当時、他センターには存在する品質管理業務を担う部署がなかったため、平成20年7月薬事業務指導時に指摘を受け、翌月から業関連総則の勉強会を開催した。平成21年1月「GMP推進委員会」を設置。開催については委員長を事業部長、副委員長を品質情報係長とし、各課の係長1名以上と主事で構成。開催については、平成26年度までは毎月行っていた。平成27年度以降は偶数月に開催し、状況に応じて臨時で開催している。この委員会の活動について報告する。

【活動内容】

1. 業関連文書、マニュアルの制定・改訂、廃棄報告
2. 機器等に係るバリデーション・キャリブレーション、修理、点検の報告
3. 自己点検の計画及び進捗状況や結果等の報告

【結果】

1. 活動メンバーは係長や主事で構成されており、マニュアル作成や自己点検の点検員などの実際に活動する担当者と直接打合せができ、情報共有がしやすい。
2. 各課年度初めにメンバー交代を行うため、固定メンバーではなく課内全体でも業関連文書やバリデーション等への理解が深まった。
3. 自己点検についても点検員に任命されているため、自己点検の日程調整や教育訓練等の打合せもスムーズに出来ている。

【考察】

平成28年6月1日より品質改善管理手順書、変更管理手順書が導入され、地域センターにおいてはPDCAサイクルを重点的に行わなければならない。よってPDCAサイクルをうまく導入するためにはこの委員会での活動をどのように活用していくかが重要である。

カイゼン・「働き方改革」の取り組みについて

第41回日本血液事業学会総会（平成29年：福岡）

【佐賀県赤十字血液センター】

上田砂智美、永沼純子、坂本恭子、北島美紅、松本光子、吉村博之、松山博之

【はじめに】

佐賀センターでは、毎週水曜日を「ノー残業デー」と決め、残業せずに帰ることを推奨している。しかし、採血課においては採血状況により終業時刻が変動し、定時に業務が終了しないため「ノー残業デー」はほとんど実施出来ていないのが現状であった。

そこで、一律定時退社ではなく各自が月に4回程度定時退社ができるように工夫した。

【方法】

平成28年12月から、課長、係長を含む採血課課員16名を対象とし、各自の「ノー残業デー」を、母体勤務日に実施した。実施前に、対象者全員に「ノー残業デー」及び時間外勤務についてアンケート調査を行った。改善活動係が1日1～3名定時退社の対象者を翌週の勤務割りが出た時点で指名し、当日の採血責任者が状況をみて退社の指示を行った。また、毎月、退社の状況を集計し課員に周知した。実施3か月後に再度アンケート調査を行った。

【結果】

月4回の実施を目標としていたが、初めの1～2ヶ月は平均2回にとどまった。その原因として残る課員への遠慮等があった。しかし、実施3か月目には、課員がお互いに協力し声掛けを行い、業務の引継ぎもスムーズになり、約半数以上の課員が月4回実施することができた。また、アンケート結果では、回答者の約93%が「満足」と回答し、「定時退社後、有効に時間が使えた。」「限られた時間で仕事を遂行するため仕事の組み立てや作業時間を意識するようになった。」「意識改革に有効だった。」等の意見がみられた。

【考察】

目標には到達出来なかったが、アンケート結果では満足度は高く、定時退社実施に向け課員全員が協力し、また課員各自が仕事に対する取り組みや退社後の過ごし方を見直すきっかけとなった。今回の取り組みは大変有意義なものだったと考える。また、この方法は最近の「働き方改革」の一手段になりうると考える。

インシデント推進委員会における採血課の活動について

第41回日本血液事業学会総会（平成29年：福岡）

【佐賀県赤十字血液センター】

北島美紅、小島律子、溝上直樹、百武雅子、藤崎美由紀、廣畑和代、松本光子、東島悦子、溝上博之、吉村博之、松山博之

【はじめに】

当センターでは、インシデントレポート提出状況が全国的にも低く、現場においてインシデントレポートを推進し、かつインシデント部会の補佐及び改善活動の実行を行うために、平成22年6月、インシデントレポート推進委員会を設置した。開催については委員長を事務部長、副委員長を総務課長とし、各課一名以上で構成。月一回以上定期的に開催した。この活動について報告する。

【方法】

- (1) レポートを集計・分析し課内での傾向を調べた。
- (2) レポート推進用のポスターを作成。課内や食堂、職員通用口等に掲示した。
- (3) レポート提出の強化月間を設け、一人一件の提出を働きかけた。
- (4) インシデント部会で改善が必要と判断された事例を、委員会の中でVTA分析・なぜなぜ分析・M-SHEL分析を行った。また、採血課においても、なぜなぜ分析・M-SHEL分析等で勉強会を行った。

【結果】

- (1) 課によってレポート提出は、職員と決めている課があり、推進委員の働きかけにより嘱託職員等の提出も増え、内容の分析・評価等が行えるようになった。
- (2) ポスターは、3パターン作成し適宜変更することで視覚的なPR効果に繋がった。
- (3) 特にヒヤリハットの推進に力を入れ、提出件数をグラフ化し目で見て分かることにより提出件数が伸びた。
- (4) リスクマネージャーを中心に、それぞれの事例から分析の手法があることを学んだ。また、意見交換や情報の共有ができた。

【考察】

平成28年8月に推進委員会は終了し、レポートの提出件数が減少している。また、未だにインシデントレポート提出に対する意識格差が大きく提出件数の個人差が大きい。採血課内では今後も課員の意識向上を促し、レポート提出継続の必要性を常に訴え、その改善策について情報を共有する必要がある。今後、将来のアクシデントの芽を摘むためにも、レポート提出推進を続けるのが不可欠だと考える。

高校生を対象とした参加型の若年層献血推進活動 ～見える化で意識改革～

第41回日本血液事業学会総会（平成29年：福岡）

【佐賀県赤十字血液センター】

牟田口佑香

【はじめに】

全国的に若年層の献血者が増加しているが、佐賀県は特に九州管内でも10代、20代の献血者数が少ない。高校への移動採血も制限される現在、これからは血液センターへ来てもらうことが益々必要となってくる。しかし、血液センターへ来所されている高校生がどこの高校からどれくらいの方が来られているのか献血者にも職員にも見えていない状況である。看護師は、献血者と接する時間が長いため、採血時間を若年層推進活動にも生かせないか考えた。また、当センターでは数年前より献血者の緊張を和らげるため、切り絵を展示している。それをもっと実用的に活用していきたいと思いこの活動に取り組んだ。

【方法】

期間は平成29年2月1日～平成29年10月31日とした。母体で献血をされた高校生を対象に、グラフへ高校名を記入し、そこに切り絵を貼り積み上げてもらった。

採血後の5分間ベッド上休憩の間に看護師がこの取組みを紹介し、献血者に切り絵を選んでもらい、採血終了後グラフに切り絵を貼ってもらった。また献血者より同意が得られた際は写真を撮らせてもらい、月1回Facebookで高校生の献血状況を写真と合わせて配信を行った。

【結果】

高校生の反応として切り絵を選ぶ際にひとつひとつが違った形をしているので楽しそうに選ぶ姿が見られ、切り絵を貼る際には他にどの高校が来られているのか関心を持ってグラフを見ていた。また、他の友達にも声をかけてみると話してくれる高校生もいた。献血に来てくれた高校生の中には、周りで献血が流行っていると話してくれることもあった。一般の献血者の方からは、高校生頑張っていますね、自分の子どもが高校生なので伝えておきますと話してくれることもあった。スタッフは、日々グラフを見て新たに高校生が来られたか関心を持つようになり、会話の中に高校生の話題が出るようになった。さらに、高校生の献血時には自然と周りの高校生にも献血を勧めるよう声掛けが出来るようになった。

【考察】

高校生の献血者数を見える化したことで、献血者やスタッフが高校生の献血に関心を持つようになり、意識改革へと繋がった。口コミで来てくれた高校生が増えたことから、見える化したことの効果があったと考えられる。高校生の献血状況をスタッフ間でも共有することが出来、看護師間だけでなく他課職員とのコミュニケーションも活発になったことから、職員が同じ目標に向かって進む原動力になっていると考えられる。

今後の課題として、口コミによって足を運んでくれた献血者は多かったがこれをブームで終わらせないために、輸血の必要性や輸血用血液について知ってもらうドナー教育も必要だと感じた。さらに、推進課と協議し、この取組みを今後どのように活用していくか検討していかなければならない。

佐賀県薬務課、学生献血推進協議会及び 佐賀県赤十字血液センターの連携による学内献血の強化について 第42回日本血液事業学会総会（平成30年：千葉）

【佐賀県赤十字血液センター】

北川弘幸、百武雅子、石田裕宜、眞砂裕延、吉本朋代、柴木弘、中島布貴子、鹿毛哲也、溝上博之、松山博之

【はじめに】

佐賀県赤十字血液センターは、10代20代の献血率が全国平均より低く、若年層の献血率向上が喫緊の課題となっている。そこで、例年佐賀県から下付される記念品について、佐賀県薬務課の発案で学生献血推進協議会の意見を取り入れた記念品を作成頂き、若年層の献血率を向上させる取り組みの1つとして試みたところ、大学での献血者の増加に繋がったので報告する。

【方法】

佐賀県薬務課から県で作成する若年層向けの記念品について大学生の意見を聞きたいとの要望があったため、5月に開催した学生の研修会で直接意見を聴取頂いた。その結果、『モバイルバッテリー』と『マスキングテープ』を平成30年度の処遇品とする意見で纏まり、デザインは学生献血推進協議会が一任することになった。完成したモバイルバッテリー240個、マスキングテープ850個についての活用方法は、若年層にダイレクトにアピールできる大学（2校）での学内献血に集中して配布した。

【結果】

佐賀大学での学内献血の献血者数は4日間で総数239名（前年176名）、西九州大学では1日間で50名（前年29名）、更に4年振りに復活した佐賀大学医学部でも2日間で104人（前年実績なし）と、前年を上回る学生の献血者数となり、10代と20代前半の献血者数の対前年比も4月・5月の2か月間で111.2%と伸長し、献血に若年層が触れる機会の増加に寄与する結果となった。

【考察】

若い人の意見を取り入れた記念品だったため、呼び込みの段階で大きな反応があり、結果として学内献血での献血者数は増加した。広報に関しても2月より稼働させたLINE@を中心にを行い、学生献血協議会のメンバーにシェアしてもらうことで拡散も効果的に行えた。時代背景やライフスタイルで若者の趣向は変化するため、若年層の献血者を増やすためには継続的な若年層の意見の聴取が今後必要と思われる。

「手浴」を活用した減損発生率低減化へ向けた取り組み 第42回日本血液事業学会総会（平成30年：千葉）

【佐賀県赤十字血液センター】

坂本恭子、北島美紅、永沼純子、上田砂智美、大町幸子、小島律子、鹿毛哲也、溝上博之、松山博之

【はじめに】

佐賀センターでは、平成28年3月より減損発生率の減少を目指す取り組みを実施している。活動開始1年目の取り組みでは、血管怒張に対する評価等が影響すると考えられる血管選択ミスを理由とする減損発生率は減少した。しかし、手指冷感等を理由とする流出不良による減損発生率は減少させることはできなかった。そこで、平成29年1月より固定施設において「手浴」を導入し、一定の効果を得ることができたので報告する。

【方法】

1. 手指冷感や細血管等の理由により、血管を怒張させる必要があると判断した献血者を対象に、本採血開始前に40℃～42℃のお湯に両手首までを3分～5分つけてもらう。
2. 手浴後は、本採血開始直前まで電子レンジ加熱式湯たんば及びブランケットを利用し、採血腕の保温に努める。

【結果】

1. 平成29年度の固定施設における減損発生率は0.83%であり、平成27年度（減損発生率1.07%）及び平成28年度（減損発生率0.99%）の結果を下回ることができた。
2. 毎月の手浴実施者数は20名～40名程で、手浴実施者数が0名の月はなかったが、夏期における手浴は、冬期より時間を短縮しての実施が多かった。
3. 穿刺部位付近を局所的に温める電子レンジ加熱式湯たんばに加え、手浴を活用することで、加温効果により血管の怒張が著明と

なる献血者も多くみられた。

4. 手浴未実施であった前年度同時期との比較では、多くの月で減損発生率が減少傾向を示す一方、夏期には増加に転じた月もあった。

【考察】

手浴導入により、固定施設における年間の減損発生率は減少させることができた。しかし、月別の減損発生率に着目すると、平成27年度～平成29年度において、夏期（7月～9月）の減損発生率が他の月に比べ高いという新たな課題が見えてきた。今後は、なぜ夏期に減損発生率が上昇するのか検証を行い、減損発生率低減に向けた取組みを継続していきたい。

備蓄廃止に伴う供給体制の見直しについて

第43回日本血液事業学会総会（令和元年：仙台）

【佐賀県赤十字血液センター】

井川福康、田中祐一、内村聡志、森優太、岩橋ゆりえ、中島布貴子、一ノ瀬知早子、池田浩、鹿毛哲也、溝上博之、松山博之

【はじめに】

2019年3月まで、県内3か所の医療機関に血液センターの備蓄所として血液製剤を保管しておき、緊急時に払い出す体制を構築していたが、この制度を廃止することとなったため新しい供給体制を構築する必要がでてきた。医療機関へのサービス低下をきたすことなく、定時配送を基本とした体制を構築するため、新しい供給体制を課内で協議した。以前の配送体制は午前1便、午後1便の2便体制であり、早朝や夕方のオーダーについては、定時外配送とならざるを得なかった。こういった状況に対応していくために、朝1便、昼1便、夕方1便の3便体制へと変更した。備蓄廃止に伴って、持出血液を車両に搭載し、旧備蓄医療機関周辺に待機をして、緊急時のオーダー等にも対応できる体制を構築した。

【結果】

定時配送率について2018年度の配送状況と比較すると、2019年3月の配送状況は総出動数249件、定時配送数127件で定時配送率は51.0%だった。2019年4月では総出動数339件、定時配送数232件で定時配送率は68.4%だった。

【考察】

定時配送を基本とした直接供給する体制を徹底するために配送便を増加したことで、2019年4月は3月と比較して定時配送率は格段に上昇した。しかしながら、従来どおりの時間や感覚で発注する医療機関もあり、現状では医療機関に浸透しているとは言えないので、さらに定時配送への協力をお願いしていく。今後の課題として、もっと効率よくかつ医療機関のニーズに合わせた供給体制を構築していくために、医療機関への情報提供・収集の強化・推進を行う必要がある。

固定施設への献血者誘導 ～原料血漿確保に向けて～

第44回日本血液事業学会総会（令和2年：広島）

【佐賀県赤十字血液センター】

林菜美子、植田曉子、佐々木美穂、北川弘幸、上田砂智美、一ノ瀬知早子、大町幸子、鹿毛哲也、溝上博之、松山博之

【はじめに】

佐賀県赤十字血液センターでは、2019年度改善活動の一環として献血推進課と採血課共同で「原料血漿確保」に向け、1日35人の成分献血者を目標とする活動を行った。今回は固定施設強化のために採血課が行った活動を報告する。

【現状】

当センターの成分献血は11ベッドからなる固定施設で行っている。2018年度成分献血者数は11,896人（PPP7,083人）。2019年度事業計画では成分献血者数12,608人（PPP8,020人）で成分献血者を712人（PPP937人）増やす必要があった。

【取り組み】

1 固定施設（実施期間2019年4月～）

35人／日を目標に掲げ、その現状と必要性を献血者に知ってもらう為、曜日ごとの成分献血者数をグラフ化し表示。またグロブリン製剤の需要増加や、その対象疾患を掲示。佐賀県独自の「ありがとうのメッセージ」にグロブリン製剤治療者からのメッセージを加え掲示・配布。11月から固定施設へ来所された全血献血者に対し成分献血へ誘導するチラシ（クーポン付）を配布。

2 移動採血バス（実施期間2019年8月～）

移動採血バスで献血をされた方を対象に成分献血へ誘導するチラシを配布（特に年に2回行く事業所を対象。11月からはクーポン付き）。

【結果】

2019年度の成分献血者は12,831人（PPP7,851人）で、事業目標はほぼ到達したが、PPPの実行計画が9,292人へ引き上げられたため（1,272人増加）最終的には成分献血者の達成率は92.4%にとどまった。また4,500枚配布した成分誘導チラシを見て成分献血に来られた方は、248人で成分献血者全体の3.7%であった。

【考察】

この活動では目標値を明確に提示し、まず血漿の必要性を啓発することから始めた。

「ありがとうのメッセージ」やチラシを読んだ方が家族や友人、同僚に献血を勧めるというサイクルができ、現実的な数値を示すことで成分献血をしようと思える環境ができたと思われる。

誘導チラシを配布する献血会場など献血推進課の意見を取り入れ話し合い協力する事で活動をスムーズに効率的に進めることができた。

トリマアクセルによる回路内抗凝固剤調整機能を使用した場合の同時血漿採取量の変化について

第45回日本血液事業学会総会（令和3年：札幌）

【佐賀県赤十字血液センター】

眞崎佐智子、永沼純子、坂本恭子、上田砂智美、大町幸子、田中幸徳、松山博之

【はじめに】

当センターでは、2018年9月から血小板採取時の凝集防止策として、トリマアクセルの回路内抗凝固剤調整を始めた。採血開始後、回路内抗凝固剤メーターの上向き矢印を押下し、回路内の血液に混合される抗凝固剤量を増やす仕組みである。これにより血小板バッグ内のAC比が上昇し血小板バッグ内に入る血漿は減少する。これが同時血漿採取量に上乘せされることを利用して献血者1人当たりの採取量増加の取り組みの一つとして生かせないかと考え、調査したので報告する。

【方法】

2020年9月～2021年2月、トリマアクセル（Ver, 7.0）にて血小板採血された1,089名を対象に調査を行った。凝集の有無に関らず全対象者に採血開始後7分～15分経過後、回路内抗凝固剤を1段階上げた。AC比0.77として全血：ACD-A液＝10：1⇒9.23：1に調整し採取履歴から採取量の調査を行った。1段階調整後も凝集がみられた場合は2段階まで調整可能とした。

【結果】

血小板10単位採血者144名を調査した結果、目標値より平均5.9mLの血漿量の増加が認められ、血小板20単位採血者945名を調査した結果、目標値より平均9.2mLの血漿量の増加が認められた。対象者全員において1人当たりの血漿量は開始前の目標値より平均8.6mLの増加が認められた。また、調整に起因する副作用の増加は見られなかった。

【考察】

2020年9月～2021年2月までのデータで延べ1,089名、目標値よりtotal9344.3mLの血漿が増加した。これは成分血漿採血（480mL）に換算するとドナー19人分の血漿量である。わずかな量の積み重ねではあるが、回路内抗凝固剤の調整は、原料血漿確保にも有効であることが分かった。血漿分画製剤の需要の増加に伴い、血漿確保目標は年々増えている。人口が少なく、女性の献血者の割合が多い佐賀県においては、血液事業の変化の中で目標血漿量を確保するために個々の献血者に適した採取方法をあらゆる角度から検討していくことが必要と考える。

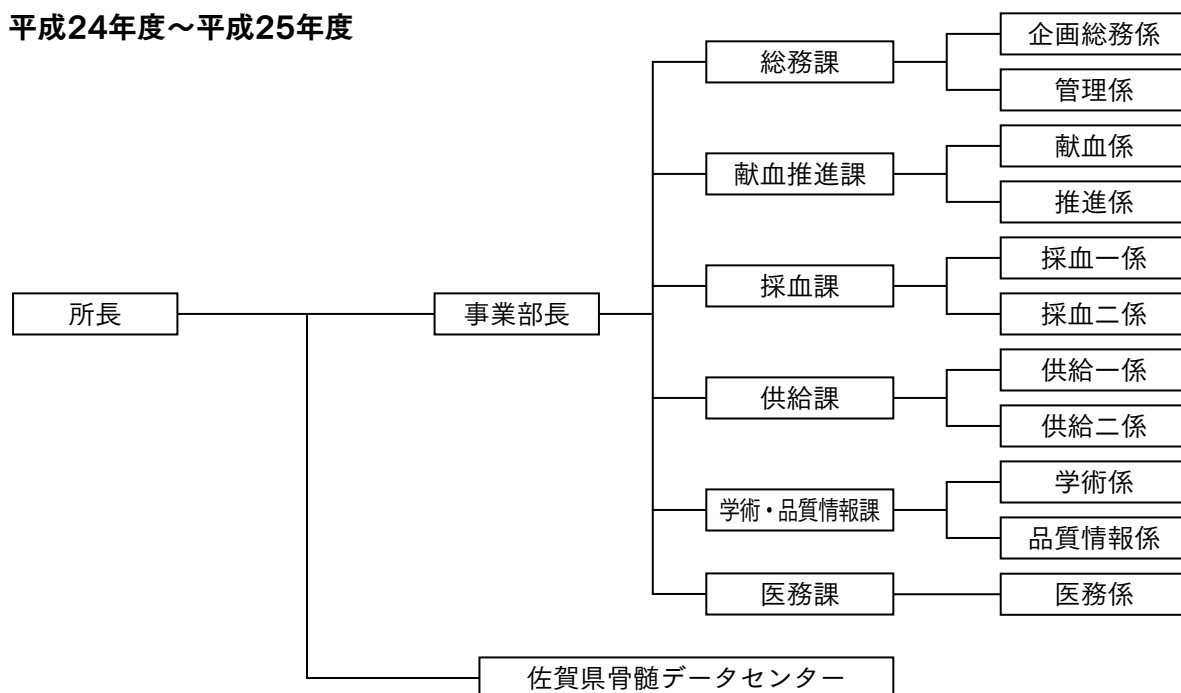


組織図の変遷

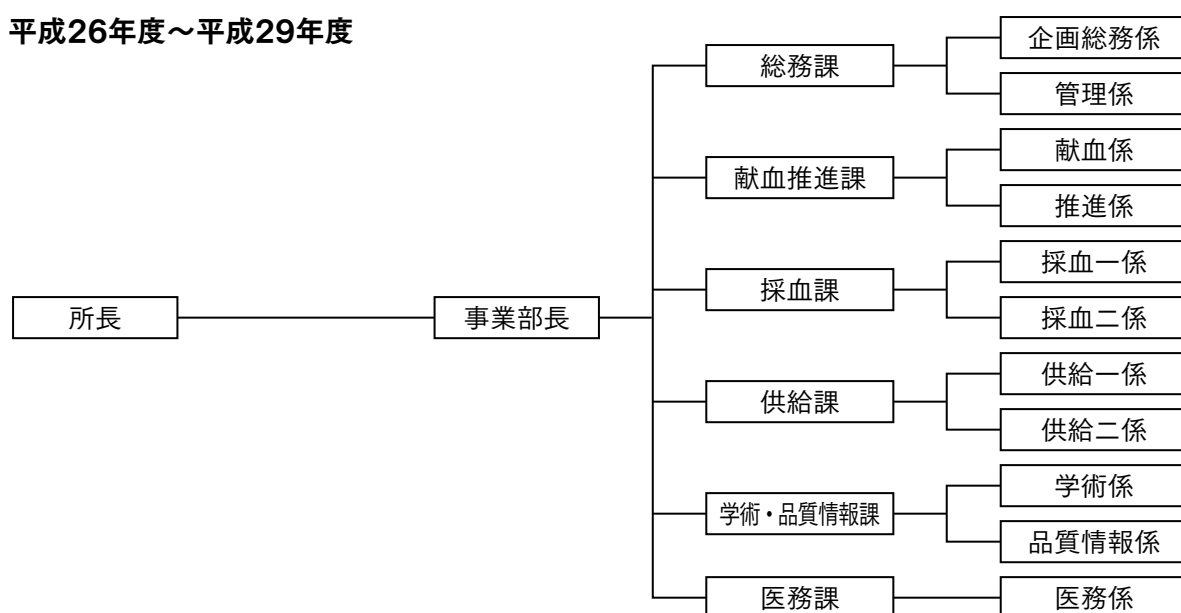


40th Anniversary

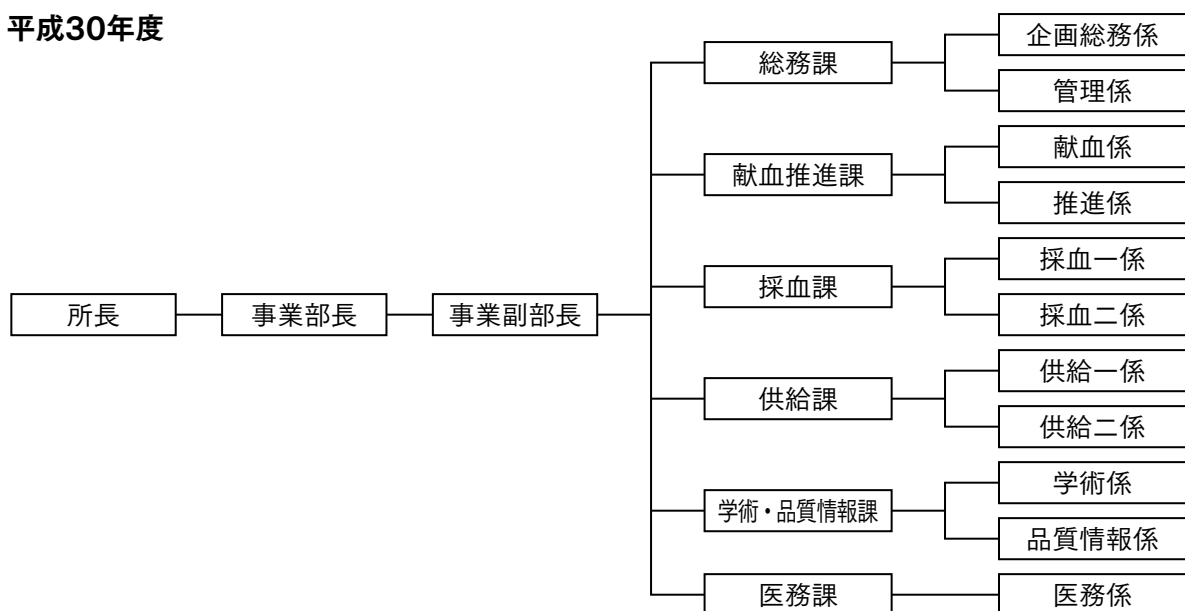
(1) 平成24年度～平成25年度



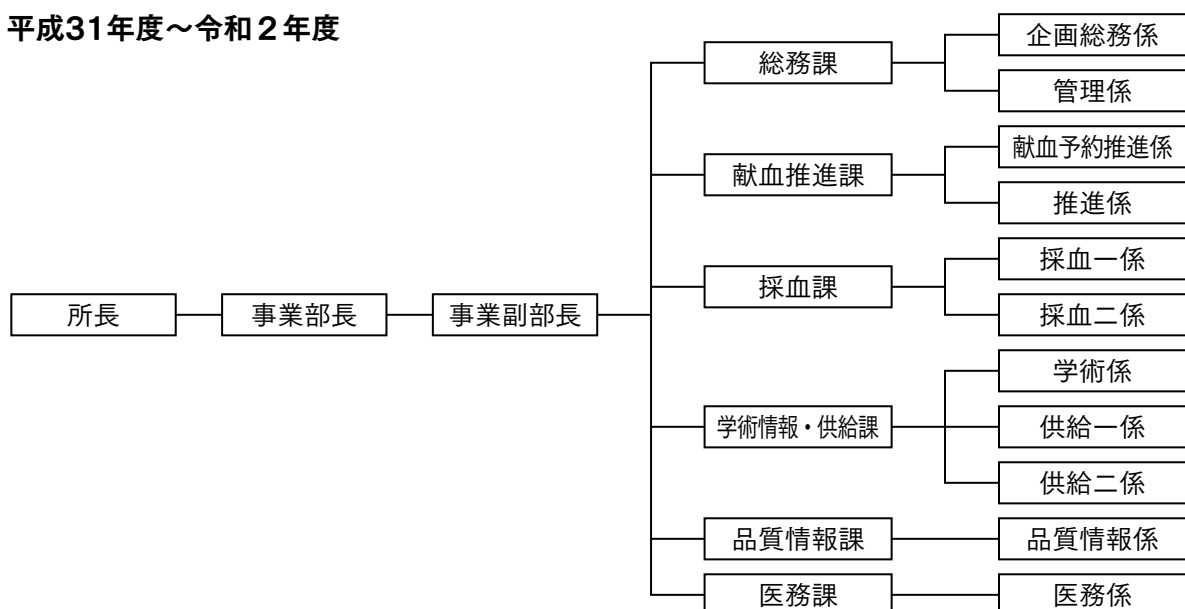
(2) 平成26年度～平成29年度



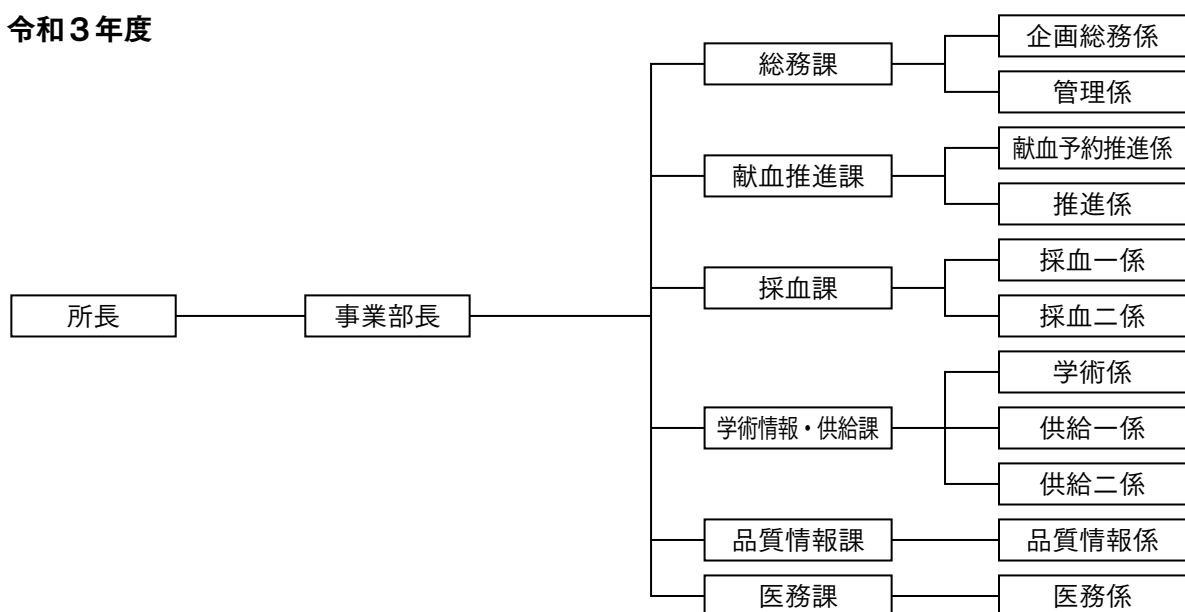
(3) 平成30年度



(4) 平成31年度～令和2年度



(5) 令和3年度



IV

創立40周年に寄せて



40th Anniversary

祝辞 創立40周年に寄せて

佐賀大学医学部長 末岡 榮三朗

佐賀県赤十字血液センターが、この度創立40周年の節目を迎えられますことを心からお慶び申し上げます。

開設された昭和57年は、私が佐賀医科大学5年次で臨床実習を開始した年に当たります。当時血液センターは実習先である佐賀県立病院好生館（現佐賀県医療センター好生館）の敷地内にあり、実習期間中に献血したことを記憶しています。卒後4年目の昭和63年から3年間医務課長として採用いただき、それ以来30年間にわたり血液センターの皆様にお付き合いいただいています。私が在任した昭和63年頃は、全国的に成分献血を推進し始めた時期で、成分献血の機器の操作を一生懸命勉強したり、地域の研修会に出かけて行って成分献血の推進活動に明け暮れていたことを懐かしく思い出します。在任最後の年に血液センターは現在の八丁畷町に新築移転し、それとともに血液事業も大きく変遷を遂げました。私自身も血液製剤を使用する立場の大学病院輸血部勤務となり、医学の進歩に伴う輸血医療と血液事業の急激な変化を目の当たりにしてきました。次々と変化する様々な医療現場のニーズに対して迅速に対応し、輸血医療を支えていただいている血液センターの皆様には心から感謝しております。

最近の10年間はBCP（Business Continuity Plan）の重要性を改めて意識する期間でした。熊本地震や度重なる大規模水害、さらにここ2年間はCOVID-19感染症によるパンデミックに振り回され、献血現場も供給業務も混乱や先行きに対する不安感を覚えながらの活動を強いられたと思います。特に新型コロナの感染拡大では、献血者確保や供給量の不安定化に加えて、血液事業に携わる方々のマンパワーを奪うという状況が生まれました。それにも関わらず、医療現場では外科手術や腫瘍性疾患における輸血医療が滞ることなく平時の医療を継続できています。「尊い生命を救うために」の理念の下で活動を続けられている血液センターの皆様の熱い思いがあったからこそ現在の現状だと思います。

ICTの進歩や社会構造の変化は地理的距離感を大きく縮めました。血液センターも県という単位から地域ブロックという単位に構造が変化しました。BCPや事業の効率化という観点からは合理的で先験的な取り組みだと理解していますが、一方で地域の密な連携の重要性もより強く感じるように思います。これからも佐賀という地域特性を理解しながら、より良い医療体制の構築のために血液センターの皆様方のお力添えをいただきたいと思います。最後に、血液事業および佐賀県赤十字血液センターのさらなる発展を心から祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

佐賀県赤十字血液センター創立40周年に寄せて

ライオンズクラブ国際協会337-C地区

第1副地区ガバナー 古賀 義行

常日頃より佐賀の地域に於いて住民が安心して医療を受けられるべく、日々血液の確保にご尽力いただいていることに感謝するとともに、敬意を表する次第です。

ライオンズクラブ国際協会は200以上の国と地域にまたがり、会員140万人を有する世界最大の奉仕団体で、青少年育成、環境保全、視力保護、災害支援、人道支援など多方面での活動を行っています。佐賀・長崎では平均30人のメンバーで73のクラブがそれぞれにあるいは協力して337-C地区として奉仕活動をしています。

日本のライオンズクラブは特に献血活動支援に重きを置いていて、佐賀県内29クラブでは2021年7月より2022年6月の年度に於いて新型コロナウイルス感染症の蔓延にもかかわらず、コロナ改善の人数と遜色なく6739人の動員で250万mlを大きく超える献血活動に協力しています。その内容は地域の様々な場所で、時にはイベントの折など様々な機会に、広報や特に会員事業所なども活用した動員、現地での勧誘、前年協力者への献血依頼、そして喜ばれている各クラブが工夫した献血協力者への感謝の品の進呈などの協力を長年続けています。

今後も毎年のリーダーのかけ声により更なる協力とその持続に力を注いでいく所存ですし、我々にとっても喜びと誇りとなりうる献血活動への協力は今後も大きな事業として続けていきたいと考えています。

創立40周年を祝して

九州電力株式会社佐賀支店

企画・総務部 人事労務グループ長 白濱 文昭

佐賀県赤十字血液センターさまの創立40周年誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

また、コロナ禍で献血が減少する中、血液の安定確保に向けた懸命な啓発活動に心から敬意を表します。

さて、弊社では地域社会貢献活動の一環として様々なボランティア活動を行っており、献血もその活動の一環として取り組んでおります。佐賀県赤十字血液センターさまには、ご多忙の中、毎年春と秋の年2回、弊社にお越しいただき、献血の機会を設けていただいております。身近なボランティア活動として献血を待っている社員も多く、毎回50名以上の九電グループ社員及び関係者が献血を行っております。

有難いことに、これまで30年以上にわたって取り組んできた献血と献血普及に関する広報活動を評価していただき、2020年には「厚生労働大臣表彰」を賜りました。これは長きに亘り弊社活動を支えていただいた、佐賀県赤十字血液センターさまのご協力のお陰があってこそその受賞だと感謝を申し上げます。

また今年3月からは、献血協力企業として佐賀県献血推進協議会委員にご推薦をいただき、佐賀県における献血取組み推進に関わる協議会に参加させていただいております。

病気の治療や手術などで輸血を必要としている方々の尊い生命を救うために、需要に応じた血液の安定確保が必要ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、血液不足が懸念されています。このような状況下だからこそ、地域社会のお役に立てるよう、引き続き微力ではございますが、献血活動への積極的な取組みを継続してまいりたいと考えております。

最後になりますが、貴センターの益々のご発展と関係者の皆さまのご活躍を心から祈念し、創立40周年のお祝いの挨拶とさせていただきます。

佐賀県赤十字血液センター様創立40周年に寄せて

株式会社戸上電機製作所 管理本部総務グループ
マネージャー 平原 直哉

佐賀県赤十字血液センター様の創立40周年誠におめでとうございます。

40年間の長きにわたり医療を支えるための事業にご尽力いただき感謝いたします。特に近年は、コロナ禍で献血協力者が減少しているとも聞き及ぶにあたり、貴センター様におかれましては、さらに大変なご苦労をされておられることと存じます。重ねて感謝申し上げます。

さて、ここで少し当社の紹介をさせていただきます。当社、株式会社戸上電機製作所は、1925年に佐賀市で創業した配電制御機器メーカーで、2025年には創立100周年を迎えます。

当社の主な製品としましては、高圧配電線に設置される高圧開閉器及びその周辺機器になります。一般の方にはなかなか馴染みのない製品ではありますが、貴センター様が医療を陰で支えておられるように、当社は電気の安定供給を陰で支える会社になります。

そんな当社と貴センター様とのお付き合いは、貴センター様の創立以来とお聞きしております。当社では、3月と9月の年に2回、本社工場従業員等を対象に、当社敷地内で献血を実施していただいております。今までに延べ8,000名弱の従業員が献血しております。また、貴センター様からは、当社の長年にわたる献血活動等に対して、計5回表彰していただいております。

当社といたしましては、これからも微力ではありますが、献血活動を継続することで貴センター様の事業活動のお役に立てればと思っております。

最後に、佐賀県赤十字献血センター様の創立40周年を迎えるにあたり、貴センター様の事業活動の功績を称えるとともに、今後も更なる発展をお祈りいたします。

創立40周年を祝して

佐賀県健康福祉部長 久保山 善生

佐賀県赤十字血液センターが創立40周年という記念すべき年を迎えられ、ここに記念誌が刊行されますこと、心からお慶び申し上げます。

本県の血液事業につきましては、輸血用血液を献血によって確保することを閣議決定した昭和39年以来、貴センターをはじめ、関係機関や各団体の方々の御支援、御協力をいただきながら、県民の皆様の温かい善意に支えられ、順調に進展してまいりました。

佐賀県赤十字血液センターにおかれましては、これまで40年間もの長きにわたり、輸血用血液製剤の安定供給や献血者確保のために御尽力いただき、献血運動を推進してこられましたことに、深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

さて、2019年12月初旬に中国の武漢市での第1例目の感染者が報告されてから、わずか数か月後の2020年に世の中を一変させた新型コロナウイルス感染症の世界的大流行による未曾有の危機は、全ての社会活動に多大な影響をもたらしました。血液事業におきましても、緊急事態宣言の発令下、全国規模で一時的に献血者の確保が困難な状況が発生し、また、度重なる感染拡大期にも献血者が減少し、医療機関への血液供給に支障をきたすことが危惧されるに至った時期もありました。

しかし、そのような中におきましても、本県では、支え“愛”の精神により、県内で必要とされる血液量を確保するだけの人数の献血者に御協力いただき、血液製剤を切れ目なく医療機関に供給することができました。これもひとえに、日々、献血者の確保に奔走され、血液製剤の適正使用の普及に努められた佐賀県赤十字血液センターの御尽力によるものと改めまして心から敬意と感謝の意を表します。

県としましては、他に代わるものがない輸血用血液製剤を日々安定的に患者さんへ届けるため、今後とも貴センターや関係機関等と連携・協力し、様々な形で献血の普及啓発に取り組んでいきますので、今後とも、なお一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、このたびの40周年を契機に、佐賀県血液センターの更なる御発展と関係者の皆様の御健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

創立40周年に寄せて

九州ブロック血液センター所長 入田 和男

平成26年4月、佐川前所長の後任として宮崎センターより赴任しました。僅か2年間の佐賀センター勤務でしたが、濃密な時間を過ごさせて頂きました。

佐賀センター職員のみなさまに受容れて頂いたこと、日赤各施設のトップの方々からご支援頂いたからこそ、今更ながら感謝申し上げます。故指山支部長（以下、当時の役職）は人格者でいらっしゃいましたし（JR九州相談役 石原 進氏を日本血液事業学会総会の特別講演の講師としてお招きする際にも、親身にご支援頂きました）、鵜池事務局長は泰然自若とされていました。唐津赤十字病院の志田原病院長は、九大麻酔・蘇生学教室の同門であり、着任早々から気さくに接して下さいました。改めて振り返ってみると、佐賀センターで経験できた様々なことが走馬灯のように駆け巡ります。

一つだけと言われれば、平成27年8月、そして11月に、月間移動効率日本一を達成し、センターを挙げて紅白饅頭でお祝いできたことになります。その年の4月、どんな指標でもよいから、たとえ瞬間風速でもよいから、職員一丸で日本一になろう！達成感を味わおう！と呼びかけました。「V字回復！！55」なるスローガンが現場発で掲げられて間もなくの、快挙でした。

目標を達成させるだけの能力が元々あったことはもちろんですが、「全職員のベクトルが同じ方向に向いたこと」、「変わること」、「変わらなければならないこと」を認識できていたことが勝因だったのではないのでしょうか。

佐賀センターは全国一、二を争う小規模センターです。何課に所属していようと、全職員の顔が見える関係を構築することが可能です。当時は、フィジカル・ディスタンスが必須の今とは異なり、B級グルメ会によって上下左右のコミュニケーションの機会を確保できたことも、信頼関係強化につながりました。ただ、功罪は紙一重。小規模集団で一旦人間関係にヒビが入ると、逃げ場がなくなってしまう。故指山支部長は、平成28年の支部仕事始め式で「人はそれぞれに違った感情をもっている。その感情は時に理性を凌駕してしまう力を持っている。このことを理解した上で人と接することにより初めて、人との繋がりが生まれる」と訓示されました。小規模集団にあっては、職員一人ひとりが銘記しなければならないことでしょう。

変化のないところに成功なし！今後も、井戸の中から飛び出す気力・知力・体力を、チームで磨き続けて下さい。再び日本一の座を獲得され、共にお祝いできることを楽しみにしています。



2015年（平成27年）11月 移動採血－稼働あたり採血数（月間）日本一達成

あとかき

佐賀県赤十字血液センターは、1982年（昭和57年）に佐賀県より業務を移管されて、今年で創立40周年を迎えることができました。

常日頃からの皆様方の温かいご支援とご協力のおかげです。

皆様方と共に歩んできたこの10年の史実を収集しておりますので、どうぞ一読いただきますようお願いいたします。

発刊にあたり、ご寄稿いただきました佐賀大学の末岡医学部長をはじめ、資料収集・編集にご協力いただきました関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

2022年（令和4年）12月吉日

佐賀県赤十字血液センター 40周年記念誌編集委員会

委員長	松山 博之
副委員長	田中 幸徳
委員	廣畑 和代、西村 元成、眞砂 裕延、嘉村 幸穂、 北島 美紅、福永 聖子、中島布貴子、内田 和孝、 大坪 正道、永沼 純子



発行者 **佐賀県赤十字血液センター**

住所 佐賀市八丁畷町10-20

TEL 0952-32-1011 FAX 0952-32-2002

出版年月日 2022年12月吉日

印刷業者 日之出印刷株式会社

表紙デザイン Design446

40th
Anniversary
ありがとう。これからも。